

# 第3章 生涯学習

開館当時から平成12年度にかけては本館における展示活動やセミナーの充実に力を注いできたが、入館者数の減少をきっかけとして平成13年度からはアウトリーチプログラムの拡充、館外への講師派遣の充実、来館団体の要望に合わせて催す特注セミナーなどを図り、生涯学習の機会を少しでも多くの県民に提供できるよう取り組みをすすめている。また、開館当時は高校生以上を主要な対象として学習支援事業をすすめてきたが、近年では学校連携プログラム等を通じた小・中学生への支援や、幼児期の環境学習支援にも力を注ぐようになっている。また直接的な支援だけでなく、地域における生涯学習の担い手を発掘・養成するプログラムを展開するとともに、市民団体・個人との連携を密にするための地域研究員制度を整えている。

## 1. 展示

開館当時、常設展示について以下のような方針に沿って展示物の設計、運用が図られていた。

- ① 対象を中学生以上に設定する。
- ② 6つの展示〔兵庫県の自然、人と自然、新しい文化、生物の歴史と生活、地球の構成と歴史、県民（各種サークル、児童、学生等）参加〕を中心に据える。
- ③ 特別展を行わず、小規模な企画展を頻繁に開催する。（→小さな企画展示室）

しかしながら当初の想定とは異なり、幼稚園児から小学生の来館者が多くの割合を占めることとなり、かなり難しい展示内容と展示手法であるため、来館者の満足度において多少の問題が生じるようになった。そのため、展示解説、企画展、ならびにセミナー等など、いわゆる「手作り」の部分においてこの齟齬を修正することに努めた。

開館当初は展示の目新しさによって多くの来館者を集めることができたが、10年を過ぎると常設展示の陳腐化が目立つようになった。「新展開」以降は、小回り、アウトリーチの充実、ならびに県民参加の明確化（キャラバン事業）を3つの柱として、展示の多様化を実現することになった。これには、企画展の他に、キャラバン展示、トピックス展示、新着資料展、ミニ企画展、館外展示、ならびにオープンセミナーといった取り組みが挙げられる。演習を意識した展示作りがはじまったのも、新展開以降である。

展示物は時間と共に、内容だけでなく物理的に古びる運命をもっている。大規模な展示替えには莫大な予算が必要となる。限られた予算の中では小規模なリニューアルと適切なメンテナンスが重要な意味を持つ。博物館における展示関係の予算の移り変わりを見ると（表3-1）、全体に展示（資料収集・整理同定を含む）に関する予算は年をおって縮小するが、それと同時に補修費も減らさざるを得ない状況であるが、当初予算を大幅に超過する補修費が生じているのが現状である。

## 1) 常設展示

人と自然の博物館の常設展示は、以下の5つの分野ごとにコーナーを分けて展示が行われている。

- ① 兵庫の自然誌 池沼と海／六甲のアカマツ林／北摂の雑木林／淡路の照葉樹林／氷ノ山のブナ林／氷上回廊／上昇する六甲
- ② 人と自然 森の変遷／自然と調査した暮らしと風景／都市化の問題／自然のデザイン／警鐘
- ③ 新しい文化 環境にやさしい暮らし方／\*都市公園／水辺の復権／\*環境にやさしい住まい方の提案
- ④ 生物の世界 森に囲まれた溪流／上流の生活／中流の生活／下流の生活／\*種分化／\*変異／\*系統と収斂／\*大陸移動と生物の分布／日本の動植物の由来
- ⑤ 地球、生命と大地 生物世界の拡大／暮らし方の多様化／海洋生物の発展／生物の上陸／哺乳類の時代／霊長類の進化とヒトの起源／地球を構成する物質と構造／岩石に残る地磁気の記録／兵庫の土台ができるまで／日本海の成立／世界の森／世界の木材

上記の常設展示の詳細については、平成8年発行の「兵庫県立人と自然の博物館 総合案内」（編集発行 兵庫県立人と自然の博物館）に詳細に記述されているので、そちらを参照していただきたい。

開館時の常設展示と現在とを具体的に較べてみると、必要に応じて以下のような入れ替えが行われてきている。（上記リストのうち、\*印がついた展示は、すでに他と入れ替えられたか完全に撤収されている展示である）。

### 新規に設けられた展示（コーナー）

- ① 共生の森
- ② ナチュラリストの幻郷

- ③ 化石工房
- ④ 恐竜ラボ
- ⑤ 丹波の恐竜化石
- ⑥ コウノトリ
- ⑦ 兵庫の自然
- ⑧ キッズコーナー

また4F情報センターは全面改修が施され、現在は主としてビデオオンデマンドによる運営がなされている。

さらに20周年を機会に、2F奥の展示スペースならびに旧企画展示室を大幅に改装し、博物館がこれまでに収集してきた多数の資料を、ひろく積極的に展示に活用した「ひとはく多様性フロア～魅せる収蔵庫トライアル～」が新たに設けられている。

#### 撤収された展示（コーナー）

主として以下のような変更が行われた。

\* ホロンビア記念コーナー → セミナー室に改装

\* 兵庫の自然 → ナチュラリストの幻郷

\* 都市模型 → 丹波の恐竜化石

また、虫の進化を学ぶシミュレーターや都市の熱環境・水環境シミュレーションゲームなど、パソコンを使った展示は

OSや機種の変遷にともなって急速に廃れることが稀ではなく、10年もたたないうちに保守用の部品調達がきわめて困難なることから、長期間にわたって満足のいく展示を維持することが非常に困難であることは、展示を作成する際に十分に注意を払うべき事柄である。

## 2) 企画展示

企画展ならびにそれに類する展示として以下のものがある。

### 企画展（特別展示を含む）

開館以来20年間において、ひとはくでは特別展ではなく、企画展示室内外を中心に行う、より規模の小さな企画展を年3回のペースで開催してきた（表3-2）。この企画展も予算の削減の影響により、2010年からは資料の展示を中心とした「特別展示」として開催されている。

### 移動展

開館から2000年までの間、企画展で展示された展示物の一部を利用して、県内の3箇所において移動展を行った（表3-3）。

### トピックス展示・新着資料展

企画展として開催する規模ではなく、ちょっとした知見や新しく収蔵品として加えられた資料を、速報する性質の展示

表3-1 展示関係の予算の移りかわり

年度	予算費目（千円）						備考
	整理同定	資料収集	企画展	屋内展示費 (展示案内等)	展示補修	キャラバン	
1992							
1993	50,159	47,883	5,000	27,843			
1994	42,706	91,681	6,000	47,437			
1995	39,926	91,681	6,000	54,559			
1996	25,755	10,000	6,000	52,114			
1997							
1998	21,066	10,000	4,945	50,838	1,721		
1999	18,959	9,000	4,450	50,838	1,721		
2000	17,063	9,000	4,450	50,838	1,721		
2001							
2002	14,504	8,100	3,783	33,200	1,721		
2003	13,053	8,100	3,391	33,200	1,721		
2004	11,748	8,100	3,052	33,200	1,721		
2005	4,814	8,100	2,329	23,828	1,635		
2006	2,167	7,896	2,248	16,920	363	2,248	
2007	2,615	7,000	2,023	13,943	363		
2008	2,092	7,000	1,618	12,659	363		
2009	1,369	4,550	0	10,541	363		当初配分
	4,500		600	10,262	3,047	200	運用分
2010	1,232	4,462	0	10,239	363		当初配分
	3,500		600	10,224	6,352	200	運用分
2011	1,109	4,105	0	8,739	363		当初配分
	3,500		1,800	9,918	5,341	200	運用分
2012	996	3,694	0	8,901	363		当初配分
	3,500		1,800	9,918	5,320	200	運用分

として、資料・トピックス展示(表 3-4)、そしてミニ企画展(表 3-5)が、年間を通じて開催されている。

(秋山弘之)

### 3) 特別展示：昆虫記刊行 100 年記念日仏共同企画「ファーブルにまなぶ」展

「ファーブルにまなぶ」展は、ファーブル昆虫記の最終巻が出版されて今年で 100 年になることを記念して企画された展覧会である。本展はフランス国立自然史博物館と日本の 5 つの博物館（北海道総合大学博物館、国立科学博物館、北九州市立いのちのたび博物館、滋賀県立琵琶湖博物館、兵庫県立人と自然の博物館）によって共同制作され、巡回開催されるというこれまでの日本の博物館にはない新しい試みである。本展覧会は、北海道大学総合博物館（2007.7.1-9.17）国立科学博物館（2007.10.6-12.2）、北九州市立いのちのたび博物館（2007.12.22-2008.2.11）、滋賀県立琵琶湖博物館（2008.4.29-8.31）の順で巡回し、最後に 9 月 20 日から兵

表 3-2 ひとはくでこれまでに開催された企画展・特別展示

年度	名称
1992	自然の瞬間をとらえる
1993	都市環境デザイン展 海と竜展
1994	植物画が語る兵庫展 世界のフタオチョウ ギ-スコロコロ大集合 生きた植物にどこまで迫れるか
1995	海からの贈り物〈貝〉 環境デザインへのいざない 兵庫県南部地震を考える
1996	みて、よかったね はさむぞクワガタ大集合 コウノトリとわたしたち
1997	名所図会からみた兵庫 水辺のいきもの いきもの感覚のやさしいまちづくり
1998	兵庫むかしむかしそのむかし-5億年の旅- くらしの中の石の世界 ぶんぶん！カナブン・ハナムグリ
1999	住む-生き物たちのアーキテクチャー- ふしぎで楽しいツル植物！ あの日を忘れない-阪神・淡路大震災被災状況記録写真展
2000	絶滅-地球生物の過去・現在・未来- 変な生き物 淡水魚
2001	21世紀のビオトープ-市民によるさまざまな取り組み 外で遊ぼう！-みんなで作る公園- 地震はどうしておこるのか-日本人の地震観の変遷-

庫県立人と自然の博物館（2008.9.20-11.30）で開催された。展示の内容

本展の展示は 1) 昆虫記の世界（スカラベやオオクジャクガなど「昆虫記」に描かれた南仏の昆虫を標本で紹介）、2) ファーブルの時代と日本（ファーブル採集標本や観察装置、手書き原稿、ダーウィンと交わした書簡などを展示し、ファーブルの生涯と彼の昆虫記を受け入れた日本の昆虫好きの文化風土の特性を紹介）、3) 100 年後の昆虫記（日本のファーブルと称される 3 人のハチ研究者岩田、常木、坂上など、『昆虫記』から 100 年後の、日本が世界に誇る昆虫学の今を紹介）の 3 つのコーナーから構成されている。また、その巡回開催に併せて、会場となる 5 つの博物館で独自企画による展示やイベントも開催した。人博では、1) 兵庫のナチュラリストたち（60 年前の宝塚の昆虫採集記録を残した手塚治虫の昆虫ノートや、篠山で虫の観察に熱中した水木しげるが描いた昆虫絵巻など、虫や自然を愛した兵庫ゆかりのナチュラリス

年度	名称
2002	ワンダフルカラー- 標本が騙る鳥の世界-小林コレクションを中心に- おいしい・たのしいタネのねた
2003	六甲山-みどり色の浪漫・未来- 採集に出かけよう！-たのしい標本づくり- 兵庫の貴重な自然-「いきもの」共生の「まほろば」
2004	ワンダフルデザイン-自然が魅せるすばらしい形- 川のしくみ 大震災を越えて
2005	神戸の植物化石 コウノトリの野生復帰と自然再生 見逃すな！はてなの世界
2006	古生代の世界 兵庫の外来生物～なんであかんの??問題と対応～ 虫の風林火山
2007	共生の風景～古写真にみる暮らしと自然～ 瀬戸内海のいまとむかし ひょうごの里山，日本の里山
2008	クリプトガミック・ボタニ- ひとはくファーブル大作戦 共生のひろば展
2009	丹波の恐竜を知ろう-3年間の発掘報告- 初夏の鳴く虫と巡回展 コウノトリのいる風景 竜と獣の道展 共生のひろば展
2010	ひょうごの生物多様性～瀬戸内海VS日本海～ 化石大集合2010-過去に起こった生物大量絶滅事件- 共生のひろば展 いきものふるさを見守るなかま展

トたちを、貴重な資料や写真等で紹介)と、2) 昆虫不思議ラボ(虫の複眼の世界を体験できる「トンボの目」など、遊びながら昆虫の不思議を体験できる体験型展示コーナー)の特設展示を設け、さらに、「ひとはくファール大作戦」として様々な特別セミナーやイベントを実施した。

### 来館者

本展の人博での観覧者数は74,409人とな

り、5館合わせた観覧者は約24万人(北大博:40,909人、科博:36,390人、北九州博:28,327人、びわこ博:55,039人)にものぼった。規模や運営形態の異なる博物館が共同で展覧会を開催するという、これまでの日本の自然史系博物館にはない事業が成功を収めただけでなく、人博にとっても、本展で実施した展示とセミナーやイベントを組み合わせるスタイルは本館の運営活動のモデルとなり、以降の「生物多様性大

表3-3 移動展一覧

年度	期間	名称	場所	観覧人数
1992	3月1日～3月31日	栗林慧写真展	県立西播磨文化会館	792
1993	4月1日～4月25日	栗林慧写真展	県立西播磨文化会館	1164
	8月20日～9月6日	栗林慧写真展	県立淡路文化会館	5100
1994	7月1日～7月15日	植物画が語る兵庫展	県立西播磨文化会館	1208
	8月10日～8月24日	植物画が語る兵庫展	県立淡路文化会館	3222
1995	5月12日～6月4日	ギースコロコロ大集合	但馬文教府	1000
	6月10日～7月9日	ギースコロコロ大集合	西播磨文化会館	2010
	8月12日～8月30日	ギースコロコロ大集合	淡路文化会館	2005
1996	4月27日～5月8日	兵庫県南部地震を考える	淡路文化会館	1851
	5月11日～5月28日	兵庫県南部地震を考える	西播磨文化会館	1925
	6月14日～7月11日	兵庫県南部地震を考える	但馬文教府	900
	8月25日～9月1日	兵庫県南部地震を考える	三田市民会館	500
	6月28日～7月30日	みて、よかったね	伊丹市立総合教育センター	991
1997	8月2日～8月30日	みて、よかったね	南但馬自然学校	2106
	9月26日～10月21日	みて、よかったね	兵庫県フラワーセンター	9995
	7月3日～7月22日	名所図会からみた兵庫	西播磨文化会館	1980
	8月6日～8月28日	名所図会からみた兵庫	但馬文教府	553
	9月6日～9月17日	名所図会からみた兵庫	淡路文化会館	400
1998	10月1日～10月12日	名所図会からみた兵庫	丹波の森公苑	25000
	7月2日～7月21日	兵庫むかしむかしそのむかし-5億年の旅-	西播磨文化会館	623
	7月29日～8月18日	兵庫むかしむかしそのむかし-6億年の旅-	但馬文教府	572
	8月29日～9月8日	兵庫むかしむかしそのむかし-7億年の旅-	淡路文化会館	823
	10月1日～10月11日	兵庫むかしむかしそのむかし-8億年の旅-	丹波の森公苑	19245
1999	3月3日～3月15日	兵庫むかしむかしそのむかし-9億年の旅-	伊丹市立総合教育センター	961
	7月24日～8月16日	住む-生き物たちのアーキテクチャー	三木山森林公園	26670
	8月21日～8月30日	住む-生き物たちのアーキテクチャー	こどもの館	16460
	9月3日～9月11日	住む-生き物たちのアーキテクチャー	淡路ファームパーク	9919
	10月2日～10月25日	住む-生き物たちのアーキテクチャー	南但馬自然学校	1071
2000	1月20日～2月9日	住む-生き物たちのアーキテクチャー	但馬文教府	942
	2月16日～3月2日	住む-生き物たちのアーキテクチャー	伊丹市立総合教育センター	1982
	4月13日～4月24日	あの日を忘れない-阪神・淡路大震災被災状況記録写真展	但馬文教府	1114
	4月27日～5月15日	あの日を忘れない-阪神・淡路大震災被災状況記録写真展	野島断層保存館	3160
	5月25日～6月13日	あの日を忘れない-阪神・淡路大震災被災状況記録写真展	山崎町防災コミュニティセンター	5269
2000	7月19日～7月31日	あの日を忘れない-阪神・淡路大震災被災状況記録写真展	阪神・淡路大震災復興支援館	12040
	8月3日～8月21日	あの日を忘れない-阪神・淡路大震災被災状況記録写真展	三木山森林公園	21270

表3-4 資料・トピックス展一覧

年度	期間	展示タイトル	年度	期間	展示タイトル
1998年～2000年 臨時展示			2006	4月1日～11月30日	吉田浩一・増田和彦コレクション(中・古生代化石)
1998	10月1日～11月8日	淡路島の第三系岩層よりイタボガキの新種の発見		12月1日～1月4日	和田コレクション(昆虫)
1999	7月20日～8月31日	カブトクワガタ・ライブ展	2007	4月28日～5月31日	タンボゴ調査・近畿2005の結果
	8月8日～8月18日	サイエンスアート展 レザーワークの世界		6月1日～8月31日	ハチの巣2点
	9月22日～10月10日	サイエンスアート展 植物画の世界		9月1日～10月31日	新家勝コレクション
2000	3月30日～4月22日	サイエンスアート展 現代植物画 文化交流展		11月1日～12月27日	神戸・阪神間の絵はがきコレクション
	4月29日～6月18日	博物館おまけ展(1)		1月3日～4月13日	但馬にいたゾウ
	9月15日～10月15日	博物館おまけ展(2)	2008	4月15日～5月31日	里山復元の取り組みと菊炭
	1月5日～3月31日	博物館おまけ展(3)		6月1日～9月19日	兵庫県のオオサンショウウオ
	11月23日～12月27日	博物館おまけ展 緊急展示 ニホンオオカミ再発見!?		9月20日～11月30日	ファールも知らなかった珍虫、奇虫
	10月15日～11月19日	ナガオカヨウラクガイ-但馬で見つかった最古のヨウラクガイ化石新種-		12月2日～1月12日	タンスに眠る古写真-暮らしの風景写真-
2002年～ 資料展/トピックス展				2月1日～3月31日	この珪化木は針葉樹? 広葉樹?
2002	4月21日～7月19日	タイ王国の哺乳動物化石	2009	4月1日～5月31日	希少種ベニバナヤマシヤクヤクを篠山で発見!
	6月25日～7月2日	エフクレタヌキモ		6月2日～8月31日	六甲山のキノコ展で展示した標本-高校生制作のキノコ標本110点
	7月20日～8月31日	藤本コレクション		9月1日～10月31日	畑中コレクション
2003	9月7日～10月31日	ウエダフネガイ化石展示		11月1日～1月11日	あれから15年-阪神淡路大震災の記録
	4月26日～6月29日	サソリモドキ	2010	2月6日～3月31日	河原で採集した珪化木(竹内コレクション展)
	7月2日～8月31日	ミヤマツトリモチ		4月1日～5月31日	生物多様性保存に向けた兵庫県の取り組み
9月1日～不明	サルスツ情報、続々	6月5日～8月31日		高槻市で発見されたタチバナチビチョッキリ	
2004	4月10日～7月4日	安芸の喰わず貝		7月10日～9月5日	神戸市須磨区で見つかった新種の貝化石
	1月21日～23日	これがセンター入試に出たバニツチカメムシだ!		9月1日～10月31日	インドネシア、ジャワ島で採集したシルバールトンの食べる植物
2005	8月15日～12月15日	兵庫県からヤコウタケ発見		11月2日～1月10日	古写真から読み解く三田の戦前開拓村の歴史
	12月20日～3月20日	藤本義昭コレクション		2月5日～3月31日	新着資料 横山 葉脈標本コレクション
				3月5日～4月10日	ミキヒメザルガイ-但馬で見つかった新種の化石二枚貝

表 3-5 ミニ企画展一覧

年度	期間	タイトル	実施主体	会場		
2001	7月20日～8月31日	世界のカブト・クワガタライブ!	ひとはく	4階イベント広場		
	3月20日～4月22日	現代植物画文化交流展	グリーングラス	4階イベント広場		
	9月26日～10月14日	植物画で見る日本の絶滅危惧植物	日本植物画倶楽部	4階イベント広場		
2002	ミニ企画展に名称変更					
	4月19日～5月6日	洋蘭展	播磨農業高校	エントランスホール		
	4月23日～5月6日	カザグルマ展	北摂カザグルマ保存会	4階イベント広場		
	6月16日～7月9日	高山超陽絵画展	ひとはく	3階通路ギャラリー		
	6月22日～7月7日	マイクロランドスケープ～未知の超深度の世界～	栗林慧	企画展示室		
	7月9日～9月1日	太地庄三写真展	太地庄三	3階通路ギャラリー		
	7月20日～9月1日	キベリハムシ・ライブ	ひとはく	3階兵庫の自然誌コーナー		
	7月20日～9月23日	中米コスタリカ～極彩色野鳥生態写真展～	神田君夫 在神戸コスタリカ共和国総領事館	3階小企画展示室		
	8月17日～8月20日	サギソウ展	篠山市立今田小学校6年生	4階イベント広場		
	10月26日～11月4日	10周年記念展示「企画展ポスターで見るひとはくの10年」	ひとはく	3階通路ギャラリー		
	11月15日～12月27日	くらしの中に県産木材を	県水産部林務課棟等	3階小企画展示室		
	12月13日～12月17日	三田中学校理科作品展	三田中学校理科研究会	3階通路ギャラリー		
	1月11日～1月26日	自然保護先進国～中米コスタリカの大自然展～	神田君夫 在神戸コスタリカ共和国総領事館	2階企画展示室		
	1月8日～1月13日	弥生小学校総合的な学習の時間成果展	弥生小学校 6年生	3階通路ギャラリー		
	2003	5月6日～5月11日	カザグルマ展	北摂カザグルマ保存会	4階イベント広場	
		5月18日～7月13日	ホテルのお部屋	ひとはく	小企画展示室	
		8月1日～8月31日	武庫川地学ハイキング	ひとはく	3階オープンギャラリー	
		9月10日～9月17日	三田中学校理科自由研究作品展	三田中学校理科研究会	4階イベント広場	
		9月13日～11月30日	みやまあかねギャラリー	ひとはく	小企画展示室	
		9月21日～10月19日	6万年ぶりの火星超大接近	西はりま天文台	小企画展示室	
		1月8日～1月17日	貴重な生き物の環境レポート	三田市立松が丘小学校 4年児童	3階オープンギャラリー	
		1月17日～2月12日	宝塚の自然写真展	宝塚自然保護協会	3階オープンギャラリー	
		2004	4月27日～5月6日	カザグルマ展	北摂カザグルマ保存会	4階ひとはくサロン
			5月13日～6月6日	リュウゼツラン展	ひとはく	4階ひとはくサロン
			6月11日～6月20日	中学生が作った博物館の展示	ひとはく	4階ひとはくサロン
			7月18日～8月31日	コウノトリ模型展示	ひとはく	エントランスホール
			7月18日～8月29日	丹波・国領展	進修火の鳥会	3階小企画展示室
8月3日～8月13日			田中和鶴海コレクション	ひとはく	4階ひとはくサロン	
8月7日～9月5日			淡路の恐竜化石展	ひとはく	3階休憩コーナー横	
8月16日～9月2日	私たちの活動報告(第I期)		阪神北ビジョン委員会	エントランスホール		
10月13日～11月3日	私たちの活動報告(第II期)		阪神北ビジョン委員会	エントランスホール		
9月7日～9月15日	三田市立中学校理科自由研究作品展		三田中学校理科部会	4階ひとはくサロン		
3月8日～5月8日	子どもたちが描く昆虫精密画展		宝塚市立北難波小学校	3階小企画展示室		
2月18日～3月6日	川の総合学習シンポジウム関連展示		ひとはく	4階ひとはくサロン		
2月11日～2月27日	小学生がミニセミナーを新聞にまとめたよ	一絶滅危惧	3階中央ギャラリー			
2月11日～3月31日	小学生がミニセミナーを新聞にまとめたよ	一大地の成り立ち	3階中央ギャラリー			
3月21日～4月24日	神戸市立森林植物園の昆虫2004	ひとはく	4階ひとはくサロン			
2005	4月28日～5月5日	たんぼぼのポトルフラワー	ひとはく/人と自然の会	4階ひとはくサロン		
	4月28日～5月5日	たんぼぼをよくみてみよう	ひとはく	4階ひとはくサロン		
	7月31日～9月3日	ドリームスタジオ100ヒストリー	人と自然の会	3階小企画展示室		
	8月1日～31日	超高解像度人間大昆虫写真展	国際花と緑の博覧会記念協会	3階小企画展示室		
	8月24日～31日	観望会05空を見てみよう	西はりま天文台	不明		
	8月25日～31日	2m望遠鏡「なゆた」の紹介	西はりま天文台	3階休憩コーナー横		
	10月27日～4月17日	ナノテクノロジー展示解説	つくば科学万博記念財団	4階ひとはくサロン		
	9月28日～10月5日	三田中学校理科自由研究作品展	三田中学校理科部会	4階ひとはくサロン		
	1月18日～22日	淡路島産貝形虫化石に関する研究成果のパネル展示と解説	ひとはく	2階化石工房前		
	2月23日～25日	この声だれ? 一分散マイクスピーカによる展示解説システム	東京理科大・多摩美術大・神戸大・ひとはく	3階小企画展示室		
	3月29日～4月2日	佐用まるごと美術館-子どもアートスクールの世界	佐用町生涯学習課・ひとはく	4階ひとはくサロン		
	2006	4月1日～3月31日	植物観察画展(3ヶ月に一度展示更新)	地域研究員/ひとはく	4階ひとはくサロン	
4月29日～5月7日		かしわもちとちまき	ひとはく	4階ひとはくサロン		
5月27日～6月4日		六甲山のスミスネズミ展	ひとはく	4階ひとはくサロン		
6月1日(随時)		ミュージアムティーチャーのワゴン展示(生き物展示)	ひとはく	4階実験セミナー室		
6月14日～7月15日		昆虫標本づくりのプロセス展示	ひとはく	4階ひとはくサロン		
7月8日～31日		イシガケチョウの生体展示	ひとはく	4階ひとはくサロン		
7月11日～30日		三田の野鳥写真展	三田野鳥会/ひとはく	3階小企画展示室		
8月7日～31日		はってなQ便覧展	ひとはくフロアスタッフ	3階小企画展示室		
9月9日～11月5日		自然史からみた兵庫の海	第四紀学会/ひとはく	3階小企画展示室		
9月18日～24日		兵庫の絶滅危惧植物 秋～フジバカマ	ひとはく	4階ひとはくサロン		
9月7日～10月4日		三田市立中学校理科自由研究作品展	三田市立中学校理科部会	4階ひとはくサロン		
10月9日～11月5日		子ども植物画展2006	ひとはく	3階通路ギャラリー		
12月2日～1月21日		刺すハチ、刺さないハチ	ひとはく	4階ひとはくサロン		
12月23日～1月21日		DPC 防災紙芝居展示会	防災とプレーパークのセンター	3階小企画展示室		
1月6日～21日		丹波の恐竜化石展	ひとはく	3階エレベータ横		
2月17日～6月10日		昔はこうして暮らしていた	ひとはく	3階通路ギャラリー		
3月20日～4月7日		知ろう活かそう三田の川 フォトコンテスト作品展	三田土木事務所/ひとはく	4階ひとはくサロン		
2007		4月1日～5月27日	蝶が消えてゆく	ひとはく	4階ひとはくサロン	
	5月3日～6月3日	丹波の恐竜化石発掘速報展	ひとはく	3階小企画展示室		
	6月1日～6月30日	臨時展示 カミガモソウ展示	ひとはく	4階ひとはくサロン		
	6月30日～7月18日	マダケの花が咲きました!	ひとはく	4階ひとはくサロン		
	7月14日～8月19日	チョウの幼虫がかってみました展	ひとはく	4階ひとはくサロン		
	9月19日～23日	兵庫の絶滅危惧植物 秋～ミズアオイ	ひとはく	4階ひとはくサロン		
	9月26日～10月3日	中学生理科作品展	ひとはく	4階ひとはくサロン		
	10月6日～12月27日	三田炭鉱～三田市で見つかったほ乳類化石の新種	ひとはく	3階ギャラリーコーナー		
	1月3日～4日	新春特別企画「今年の干支『ネズミ』大集合」	ひとはく	4階ひとはくサロン		
	2月1日～28日	「象量箱」展	ひとはく	4階ひとはくサロン		
	2月17日～6月10日	遠藤先生と行った『冬の鳥観察会』	ひとはく/ゆりのきフィールドウォーカー	3階ギャラリーコーナー		

表 3-5 (つづき) ミニ企画展一覧

年度	期間	タイトル	実施主体	会場
2008	4月1日～4月13日	第2回「知らせたい今・伝えたい未来へ」三田の川フォトコンテスト作品展	三田土木事務所／ひとく	4階ひとくサロン
	4月17日～5月11日	遠藤先生と行った『冬の鳥観察会』	ひとく／ゆりのきフィールドウォーカー	4階ひとくサロン
	6月14日～6月22日	お化けノアザミ実物展示	ひとく	4階ひとくサロン
	6月15日～6月29日	篠山市の小型脊椎動物化石速報展	ひとく	3階小企画展示室
	6月24日～7月18日	野草のお茶を楽しもう	ひとく	4階ひとくサロン
	7月1日～7月13日	絶滅の恐れのある植物－科博コラボ・ミュージアムinひとく	ひとく	4階ひとくサロン／3階ギャラリーコーナー
	7月20日～8月31日	バイオメディカル展	ひとく	4階ひとくサロン／3階ギャラリーコーナー
	7月20日～8月31日	丹波の恐竜化石～夏休み期間特別展示～	ひとく	3階小企画展示室
	9月13日～9月18日	三田市中学校理科作品展	三田市立中学校理科部会	4階ひとくサロン
	12月5日～1月12日	ネズミさんありがとう。ウシさんようこそ！	ひとく	4階ひとくサロン
2009	2月10日～5月31日	六甲山のキノコ展～リアルな森の妖精たち～	兵庫県立御影高等学校／兵庫きのこ研究会／ひとく	4階ひとくサロン
	3月20日～4月26日	第19 回堀明子詩集『四季の色』展	詩集『四季の色』を読む会	3階ギャラリー、4階ひとくサロン
	4月28日～5月31日	子供のアトリエひこうせん展	ひこうせん／ひとく	3階ギャラリー、4階ひとくサロン
	6月10日～8月31日	ホッパーズ	ひとく	4階ひとくサロン
	6月10日～7月31日	コウノトリの巣から発見された絶滅種アカマダラハナムグリ	ひとく	4階ひとくサロン
	8月10日～8月20日	自然環境シミュレーター『ピオトープ』をつくろう！	ひとく	4階ひとくサロン
	8月21日～11月23日	がんばれ！佐用町	ひとく	3階ギャラリー
	9月1日～10月31日	ぎっちょん君ハウス	ひとく	4階ひとくサロン
	9月1日～12月6日	だまし絵といろんなだまし	ひとく	4階ひとくサロン
	9月19日～25日	三田市立中学校理科自由研究展	三田市立中学校理科部会	4階ひとくサロン
	12月12日～1月11日	トラさんようこそ！	ひとく	3階ギャラリー、4階ひとくサロン
	12月5日～2010年1月11日	篠山の角竜と丹波の蛙化石	ひとく	3階小企画展示室
	2月10日～3月28日	日本一のダリアを守りたい～ふるさと西谷を感じよう～	宝塚市立西谷小学校 /ダリアを楽しむ会／ひとく	3階ギャラリー
2010	2月11日～5月16日	六甲山のキノコ展2010～リアルな森の妖精たち～	兵庫県立御影高等学校 /兵庫きのこ研究会／ひとく	4階ひとくサロン
	6月5日～8月31日	はってなQ便展～恐竜は本当にいたの？～	ひとく	4階ひとくサロン
	8月7日～10月6日	ひとく多様”製” 絵画展「ゾウが描いたぞう……」	よこはま動物園ズーラシア／ひとく	3階アースシアター前展示フロア
	10月31日～11月30日	COP10に行ってきました	ひとく	4階ひとくサロン
	12月11日～1月10日	ウサギさんようこそ	ひとく	4階ひとくサロン
	2月5日～4月10日	植物画で語るキョスミウツボの生活	GREEN GRASS／兵庫県植物誌研究会／ひとく	4階ひとくサロン
	2月15日～5月15日	六甲山のキノコ展2011～野生のキノコの不思議な魅力～	兵庫県立御影高等学校 /兵庫きのこ研究会／ひとく	4階ひとくサロン

作戦」等で、そのノウハウが活用されることとなった。

(橋本佳明)

#### 4) ユニバーサル化：ユニバーサル社会と人と自然の博物館－これまでの取り組みと今後の課題

現在の博物館は、生涯学習の重要性が認識されたために生涯学習施設として生まれ変わりつつある。新しい博物館をめざす人と自然の博物館には、できるだけ多くの人に、どれだけわかりやすい展示を提供していくかが鍵になる。それは「ユニバーサル社会（兵庫県 2005）における生涯学習施設としての博物館」と捉えることができる。この時代認識の下で、人と自然の博物館のこれまでの取り組みと今後担うべき新たな役割を考える。

博物館に来て学習をする人びとは、抽象的な「人びと」ではなく具体的な顔の見える個人個人である。すなわち、「人びと」とは、幼児を含む子どもとその家族、高齢者、さまざまな障がい者（兵庫県 2005）、さらに日本に来て間もない在日外国人（外国人県民の一部：兵庫県 2005）などの人びとと捉えるべきである。その意味で人と自然の博物館の役割を考える際は、生涯学習という視点とともに、保健、医療、福祉、労働、まちづくり、および学校教育などを合わせ考

る姿勢が重要である（兵庫県 1999、兵庫県 2005）。

かつてはバリアフリー・デザインによって高齢者や障がい者が移動しやすいように道や建物の基準が作られ、改善されてきた。これは北欧のノーマライゼーションの理念（亀山、2003）を基本としたもので、国際障害者年（1981）や国連障害者の10年（1983-1992）（「アジア太平洋障害者の十年」として2012年まで延長）などもあって、障がい者への配慮は社会に浸透しつつある。これで少しずつ、ハンディキャップがあっても街なかや建物の内部は移動しやすくなった（鈴木 2006）。しかし、バリアフリー・デザインには、一部の人のつごうに配慮するあまり、普遍的な使いやすさは犠牲になっているという批判があった（国土交通省 2005、鈴木 2006）。そのため、ユニバーサル・デザイン（以下UDと略記）という概念が生まれた。

身体障がい者であったR.メイスは、「できるだけ多くの人々が利用可能であるように製品、建物、空間をデザインすること」をUDと定義した。UDは、障害の有無、年齢、性別、国籍、人種などにかかわらず、さまざまな人びとが快適によく使えるように、あらかじめ計画する考え方である（国土交通省 2005、ユニバーサルデザイン・コンソーシアムのホームページ参照）。人と自然の博物館は学習する人を選ばないから、

特定の人にだけ適したバリアフリー・デザインではなく、あらゆる人に適したUDを選ぶべきである。

ところで博物館でUDを考える時、従来は考慮されていないが、生涯学習施設では特に考慮しなければならない問題がある。それは展示や展示解説、広報のための印刷物やインターネットを通じたデジタル情報などの学習支援にかかわる施設や情報のUDである。兵庫県は全国に先駆けて制定した福祉のまちづくり条例（1992）に基づき、多くの人が利用する施設や、道路、公園、鉄道駅舎などのバリアフリー化、ユニバーサル化に取り組んできた。人と自然の博物館もこの条例に従って建物の整備を進めてきたが、今後は生涯学習施設の特徴に留意するべきである。ここでは特に展示と接遇に重点をおいて論じる。さらに、人と自然の博物館では「地域展開を通じた連携」（P83）が重要であるが、地域との連携のために、さまざまな人をつなぐUDの考え方は欠かせない。博物館では「イベントのUD」（兵庫県 2007）と、学習のための展示や展示解説のユニバーサル化を組み合わせた展開が必要である。

### 館内の展示、その他のサービス

人と自然の博物館の展示やサービスを、子どもや高齢者、障がい者、日本語のよくわからない人の立ち場に立って、よいところ・悪いところを検討した（表3-6）。

展示はガラスに囲まれたものが多く、視覚障がい者、中でも全盲者には不親切である（たとえば広瀬 2007）。展示解説の音声は情報ボックスで聞けるが、展示と離れていて、実物を触りながらそれが何であるかはわかりようがない。またガラスで囲まれた展示は子どもや車イス利用者の視点を意識しないと、照明がガラスに反射して見にくいことがある（公共交通機関の旅客施設におけるバリアフリー整備ガイドラインによい例がある：国土交通省 2007）。

視覚障がい者には視覚だけに訴える展示が無意味なのと同様、ろう者には聴覚にだけ頼る展示は意味を持たない。基本的に展示は複数の感覚で鑑賞でき、展示解説はマルチ・モーダルなものにすべきである。

現行の解説は学術用語が多く、一般の入館者にとっても難解である。また子どもの発達段階やコミュニケーション障がい者、読字障がい者を意識していないため、文章がわかりにくい（三谷 2011）。さらに、ほとんどの解説は日本語でしか書かれていない。これは日本語のわかる入館者しか想定していなかったためであり、ひとくく新聞や館内アナウンス、インターネット、接遇においても日本語のよくわからない入館者（三谷 2009）は視野になかった。ただ、二色型色覚者にもわかりやすい色づかい（三谷 2009）はできていた。

展示スペースは段差が少なく、子どもや高齢者、障がい者もスムーズに移動できる（兵庫県 2007）。しかし館内の照明は暗いところがあり、高齢者や弱視者には見にくい。展示スペースのつくりは複雑であり、特に高齢者や知的障がい者は自分のいる位置がわかりにくい。視覚障がい者のための触

地図はエントランスホールに据え付けられているものの、館内のつくりが複雑であるために一度では把握しにくい。その上、触地図の前に物が置かれていることがあり、必要とする当事者がいても触れることができないことがある。

おもな印刷物は、『総合案内』と『ひとくく新聞』である。どちらも写真やイラストが多く、子どもや読字障がい者にもわかりやすい。しかし、文章は学術用語が頻出する。日本語のわかりにくい人にはコミュニケーション支援絵記号（共用品推進機構のホームページを参照）の使用が有効だが、使われている写真やイラストは理解しやすく、支援絵記号の働きを代行すると思える。

館内アナウンスは明瞭でわかりやすいが、子どもには難しいことがある。また高齢者は難聴などのためによく聞き取れないことがある。さらに、基本的に日本語でしかアナウンスは行っていないので、日本語のわかりにくい人には内容が伝わらない。ろう者には、音声だけのアナウンスは意味をなさない。

フロアスタッフや守衛はきめの細かい入館者対応を心がけている。そのため、子どもやその保護者、高齢者や障がい者は安心して入館できる。しかし、館員のほとんどは点字や手話がわからず、日本語しか理解できない場合がある。アナウンスの例と合わせて、このことは緊急時の致命的な事故につながりかねない。日本語のわからない人やろう者などをどう誘導するのか、今後、常に有効な方策を講じておくべきである。

### 地域との連携とUD

博物館内のユニバーサル化の課題は、当然ながら、博物館外でも実行されるべきである。博物館外では、長期入院をしている子どものいる病院や障がいのある幼児、児童、生徒を問わず療育施設、特別支援学校、フリースクールなどとの連携に、UDが有効だろう。これらの施設にも教科書では満足できない知識欲を持つ子どもがいるが、障がいを無視した通常のセミナーでは、そのような子どもに対応しきれない。さらに、一定の医学的な基礎知識と子どもの心理や療育への理解がなければ、UDを導入することはできない。同様のことは、成人障がい者の地域支援センターやNPO/NGO、高齢者支援施設などでも言える。博物館員が地域に出て、UDを導入した連携を行うには、館員に知識と経験が必要である。

### 協働で作る生涯教育プログラムと

### 当事者・保護者によるチェック

UDを意識した連携を行うためには、病院の医師や看護師、コメディカル、あるいは特別支援学校やフリースクールなどの教育者、保護者、さらに、理想的には当事者が参加して生涯学習プログラムを作ることが望ましい。当事者をはじめ多くの立場の人が参加することによって、本当の意味でUDは成立する。当事者が参加しないものは、ユニバーサル化されているように見えても実際には当事者に使えなかったり、当事者以外の人に参加しないと、単にバリアフリーになっただ

けで一般の人には使えなかったりする。UDを意識した生涯教育プログラムの実行には、当事者をはじめとする多くの立場の人の制作段階での参加や、プログラム制作の過程で予期しなかった不備のチェックが不可欠である。このふたつを組み込んだ協働計画の立案（兵庫県 2007）が必要となる。

## 文献

- 広瀬浩二郎（2007）企画展「さわる文字、さわる世界」の趣旨をめぐって——“つくる力”と“ひらく心”を育むために．国立民族学博物館・広瀬浩二郎（編）UD ライブラリー だれもが楽しめるユニバーサル・ミュージアム“つくる”と“ひらく”の現場から．91-108, 読書工房, 東京
- 兵庫県（1999）兵庫県地域福祉支援計画．兵庫県, pp. 61.
- 兵庫県（2005）ひょうごユニバーサル社会づくり総合指針．兵庫県, pp. 30
- 兵庫県（2007）ユニバーサルデザイン対応イベント実践マニュアル～だれもが楽しく参加できるイベントづくり～（平成 19 年 12 月改訂版）．兵庫県, pp. 27
- 亀山幸吉（2003）障害者施策の動向と今後の展望を探る．ノーマライゼーション障害者の福祉, 268
- 国土交通省（2005）ユニバーサルデザイン政策大綱．国土交通省, pp. 19.

国土交通省（2007）公共交通機関の旅客施設に関する移動等円滑化整備ガイドライン—バリアフリー整備ガイドライン（旅客施設編）．国土交通省, pp. 151

三谷雅純（2008）障害のある子どもたちとの社会教育活動：障害の種類に応じた野外活動やテキスト作りを中心にして．人と自然 19: 51-60

三谷雅純（2011）ユニバーサル・ミュージアムで文章はどう書くべきか：コミュニケーション障がい者への対応を中心にした年齢、発達、障がいの有無によるギャップ克服の試み．人と自然 22: 43.51

鈴木賢一（2006）バリアフリーからユニバーサルデザインへ—交通バリアフリー法の見直し—．国立国会図書館調査と情報, 526, pp. 10

## （付記）

福祉のまちづくり条例・施行規則(1992)(最終改正 2011 年)（兵庫県）(2012 年 3 月 30 日閲覧) [http://web.pref.hyogo.jp/wd20/documents/000181892.pdf]

（財）共用品推進機構のホームページにある「コミュニケーション支援用絵記号デザイン原則（JIS T0103）」に制定（経済産業省、2005）されたコミュニケーション支

表 3-6 ユニバーサル・デザインの観点から見た、ひとへの展示やサービスの良いところ・悪いところ

	子どもにとって		高齢者にとって	
	良いところ	悪いところ	良いところ	悪いところ
展示		ガラスでライトが反射する。 はく製など、触ってはいけないものがどれだかわからない。		
展示解説の文章		学術用語が多く、漢字・文章ともに難しすぎる。		文章が長すぎる。字が細かすぎる。
展示スペース	複雑な構造を利用して遊べる。	構造が複雑で、迷うことがある。	座れるスペースがあつてよい。	暗くてよく見えない。  構造が複雑で、自分のいるところがよくよくわからない。
印刷物（総合案内、ひととはく新聞）	（総合案内・ひととはく新聞）写真が多くて親しみやすい。	（総合案内・ひととはく新聞）漢字・文章ともに難しい事がある。	（ひととはく新聞）行間にゆとりがある場合は見やすい。	（総合案内）ルビと本文がごっちゃになる。
アナウンス		難しい言葉がある。		高齢者には聞こえにくい事がある。
フロアスタッフや守衛	近くにいると、困った時、安心できる。		高齢者の困っていることがわかるスタッフがいる。	
その他				



援絵記号の例（2012年3月30日閲覧）[[http://www.kyoyohin.org/06\\_accessible/060100\\_jis.php](http://www.kyoyohin.org/06_accessible/060100_jis.php)]

UDC ユニバーサルデザイン・コンソーシアムのホームページ：「ユニバーサルデザインとは？」（2012年3月30日閲覧）[<http://www.universal-design.co.jp/aboutus/idea/>]

（三谷雅純）

## 2. セミナー

### 1) 新展開前

1992年10月の開館当初には講演会や観察会などのセミナーは5つの研究部で分担し、そこで担当者を決めて実施された。セミナー全体の企画は、各研究部の委員と普及課職員からなる広報普及委員会にて検討、決定された。セミナー実施には、指導主事ら普及課職員が受講者の募集や受付などを行い、研究員は資料の準備と講師を務めた。指導主事と共同でセミナーを進めることは、彼らの自然や科学への関心や理解を高める一方で研究員の見識を広げ、教育能力を高めることにもつながり、相互に有効であった。セミナーの種類には、座学形式の講義や講演会、室内での実験・観察などの体験型セミナー、野外での自然観察会、他の博物館などをまわる施設見学会があった。新展開前で特筆されるのは、夏季を中心とする数日間に外部講師と行う特別集中セミナーであ

る。これは、研究型博物館として出発した人と自然の博物館の特色の一つで、人と自然の共生に関する最新的话题を市民にわかりやすく解説したり、総合共同研究の成果を報告して今後の研究の方向性をともに議論したりする貴重な機会であった。

新展開前のセミナーは、千葉県立中央博物館や神奈川県立生命の星・地球博物館などの研究型の自然史系博物館と比べて、実施数や参加者数で劣るものではない（表3-7）。しかし、同じ近畿圏の大阪自然史博物館や滋賀県立琵琶湖博物館と比べると、両者ともに少ない。これらの博物館では友の会補助スタッフの協力や普及教育部門の研究員の存在により、子どもや親子が対象のセミナーが盛んに行われていた。一方、人と自然の博物館では子どもや親子向けのセミナーが少なく、小学生対象のセミナーは理科推進員による子ども理科教室くらいであった。野外での自然観察会も少なく、室内での講義や実習・実験が主であった。このような内容は、生態園のある千葉県立中央博物館や市民公園内にある大阪自然史博物館で、自然観察会がセミナー数の5割以上を占める点と大きく異なっている（表3-7）。講義や実習・実験も小学校高学年以上が対象であり、人と自然の博物館では常設展示と同じく普及教育も、高齢者を中心とした大人や高校・大学生を対象としていた。

人と自然の博物館は、姫路工業大学の自然・環境科学研究

障がい者にとって		日本語のわかりにくい人にとって	
良いところ	悪いところ	良いところ	悪いところ
	ガラスでライトが反射する。（車いす） ガラスで何が展示されているのかわからない。（全盲） 視覚や聴覚など、ひとつの感覚に頼る展示や展示解説では、わからない。（視覚、ろう）		
2色型色覚の人も読みやすくなっている。（色覚）	文章が長すぎる。（コミュニケーション、読字）		ほとんどの解説が、日本語でしか書かれていない。
比較的、車いすでスムーズに移動できる（車いす）。	構造が複雑で、よくわからない（視覚、知的）。		緊急時の避難には、日本語しか期待できない。
	案内用の触地図は、途中に障害物があつて触れることのできない場所がある（視覚）		
2色型色覚の人も読みやすくなっている（色覚）。	（総合案内）字が詰まりすぎて読めない（コミュニケーション、読字）。	写真やイラストがコミュニケーション支援絵記号（*）の働きをする場合がある。	（ひとはく新聞）日本語の印刷物しかない。
	音声しか手がかりがない（ろう）。		日本語でしか案内がない。
近くにいと、困った時、安心できる。	近くにいと、必要な時、助けてもらえない。		
	館員は、手話がわからない（ろう）。点字がわからない（全盲）。		ほとんどの館員は、日本語しかわからない。

所を附置して大学教員制を導入し、高度な研究成果を生涯教育に反映しようという意図をもって開館した。上記のようなセミナー開催の背景には、人と自然の共生について高度な情報発信を行い、博物館の理想とする人と自然の共生のあり方の構築に貢献しようという理念があった。

## 2) 新展開後

2001年度は新展開が試行され、2002年度から共生博物館を旗頭に新展開が開始された。新展開では、担い手の養成と県民ニーズに応えた学習の場の提供が中期目標に掲げられ、生涯学習支援の大変革がなされた。セミナーなどは研究員併任による生涯学習事業室と生涯学習課（旧普及課）が担当し、広報普及委員会が廃止された。研究員担当のセミナーは、一人ないしは少人数の研究員による実施形式となり、受益者負担の「一般セミナー」と来館者が対象で無料の「オープンセミナー」に分けられた。研究員には責任者として実施する一般セミナーの数や受講者数の確保に目標値が設定された。この研究員単位でのセミナー実施は、研究員の顔と姿がより見える博物館にしようとの方針の表れでもあった。

セミナーの種類や形態は、担い手の養成と関連した事業展開の中でさまざまに変貌した。2002年度にはひとくくキャラバン事業に合わせて県内各地でキャラバン・セミナーが開始され、2003年度には学校教育支援の拡充を目指して高校連携セミナーと夏季教職員セミナーが始まった。2004年度には地域研究員養成事業が始まり、来館団体の要望に広く応えるべく特注セミナーが始まった。2006年度からは前年度の共生のひろばの開催を受けて、担い手育成（地域研究員養成）型の一般セミナーを展開する試みが進められた。新たな

な受講者層を開拓するため2007年度には、セミナーガイドによる広報から1年間の行事予定や研究員の紹介ページを含む「ひとく手帖」による広報へ移行し、オープンセミナーへの演示手法の取り込みが呼びかけられた。

2008年度からの第二期新展開では、生涯学習院と演示を理念に掲げた試みがなされた。生涯学習事業室は生涯学習推進室に室名変更となり、生涯学習課とセミナー対応を進めた。第二期では博物館の生涯学習を文字通りに解釈し、ゆりかごから墓場まで生涯にわたる学習機会の提供を目標とした。このため、①園児から高齢者までに対応した段階的・連続的な学習プログラムの開発・提供と、②担い手の養成による生涯学習の場と機会の拡大を具体的な目標に定めて、演示手法の最大限の活用や年度毎のテーマ設定による多様なセミナーの実施により、達成を図ろうと努力を続けている。以下では、新展開が試行された2001年度以降におけるセミナーの実施状況をふりかえる。

### (1) 一般セミナー

一般セミナーは研究員や連携活動グループ、指導主事等が実施するもので、受講者の募集などを生涯学習課が行っている。内容的には、新展開前に広報普及委員会で行って、研究部で分担していたセミナーや企画展関連講座などに相当する。この対応に基づき一般セミナー開催数の推移を図3-1に示した。開催数は阪神淡路大震災の発生した翌年度の1995年度に倍増して100件を超えたが、その後は80～100件で変化がない。しかし、新展開試行後の2001年度以降には再び倍増して200件を超え、第二期開始の2007年度以降はさらに250～300件に増加した。このように一般

表 3-7 関東と近畿の主な公立自然史系博物館における普及教育プログラムの比較（平成7年（1995年）度）。滋賀県立琵琶湖博物館のみ平成10年（1998年）度。数値は各館の館報の記載に基づく。

博物館名	常勤職員数	学芸員数	普及教育プログラム実施日数					総日数/総参加者数	備考	
			自然観察会	実験・実習	講義・講演	映画会	同定会・相談会			
<b>兵庫県立人と自然の博物館</b>										
(平成7年度)	51	36	日数	13	27	30	3	0	73	兵庫県フラワーセンターと共催の花の学習推進員（非常勤）2名 教室10回（446名）含む
		(兼務24)	%	18.6	38.6	42.9	-	0.0		
			人数	258	894	709	1710	0	3,571	
			%	13.9	48.0	38.1	-	0.0		
<b>大阪自然史博物館</b>										
(平成7年度)	31	13	日数	39	4	14	24	1	82	友の会補助スタッフ制度でのべ139名 友の会主催行事17、参加者973名（月例ハイク12、合宿1、その他6）
			%	67.2	6.9	24.1	-	1.7		
			人数	1973	52	995	2233	163	5,416	
			%	62.0	1.6	31.3	-	5.1		
<b>千葉県立中央博物館</b>										
(平成7年度)	76	56	日数	53	9	36	0	2	100	展示解説員による解説（定時解説、随時解説、ポイント解説、一周解説、特別展解説の5種類） 合計8109回、参加者数26808人
			%	53.0	9.0	36.0	0.0	2.0		
			人数	1043	160	813	0	73	2,089	
			%	49.9	7.7	38.9	0.0	3.5		
<b>神奈川県立生命の星・地球博物館</b>										
(平成7年度)	36	21	日数	10	24	6	0	0	40	
			%	25.0	60.0	15.0	0.0	0.0		
			人数	416	981	832	0	0	2,229	
			%	18.7	44.0	37.3	0.0	0.0		
<b>滋賀県立琵琶湖博物館</b>										
(平成10年度)	40	27	日数	15	35	39	0	4	93	質問コーナー（801件/297日）、フロア アートーク、ガーデントーク 教職員等研修会45件（2138人）、博物館体 験学習（71校、5338人）
			%	16.1	37.6	41.9	0.0	4.3		
			人数	328	1614	409	0	62	2413	
			%	13.6	66.9	16.9	0.0	2.6		

セミナー数だけから見ても、生涯学習機会の提供が新展開により大きく増加したことが明らかである。

一般セミナー受講者数は、1995年度には前年度の約2倍の3,000人弱に、2000年度には前年度の約3,000人から5,000人弱に、それぞれ大きく増加した。2000年度以降は年間5,000人の受講者数を維持している。2007年度以降にはセミナー数の増加に比べて受講者数は安定ないしは漸減傾向にある。これは、担い手育成を目的とするセミナーへの転換が行われ、少人数を対象に高度な内容を段階的に学習する一般セミナーが増加したためである。今後は、担い手育成型セミナーを受講し、地域研究員や連携活動グループの一員として、または地域の社会・教育活動を担う一員として活躍する受講者の状況を把握し、セミナーの実施効果を評価する必要がある。

### (2) オープンセミナー

オープンセミナーは研究員や指導主事、フロアスタッフ、連携活動グループ等が実施するもので、生き物や人と自然8の共生などの話題に関心が低い初学者の興味を引き、より深い学びへと導くことを目的の一つとする、当日参加できる催しである。段階的なセミナー展開の導入として重要な意味を持つ。研究員は年間に一定回数(2012年度は年3件以上)のオープンセミナーを実施することとしている。2007年度から毎年500～1,000件が開催され、参加者数は年間2万～3万人であった。セミナー内容は、館内の展示解説から実体顕微鏡などの器具を用いた実習・観察や、紙工作などをしつつ自然のしくみを学ぶ例など多種多様で、開催時間や1日の実施回数も異なる。第二期新展開(2008年度以降)ではオープンセミナーに演示手法を活用する目標があげられたが、研究分野や研究員によりその採用程度には差異がある。今後は演示手法の導入例を相互に評価してオープンセミナー

の内容を向上させ、より多くの参加者を深い学びに導けるように進める。

### (3) 特注セミナー

人と自然の博物館では従来より、学校団体などの来館団体から講師や講義内容の要望を受け、講義や実習・観察を行う機会が多かった。小・中・高等学校、高齢者大学などの生涯教育施設、他の自然系博物館、行政機関などより依頼を受けて館外で行う講演や講義も多かった。これは、姫路工業大学の自然・環境科学研究所が附置されたことで25名の研究員が大学教員の肩書きを得て、館外講演等を受けやすくなった点を反映していた。2003年度までは館内・館外講演が主にシンクタンク事業として位置づけられ実施された。2004年度からは、担い手育成を目標とした生涯学習事業の一つに館内講演を位置づけ、合わせて来館団体数の増加を図ることを目的に特注セミナーが開設された。開設後も、受講者層を考慮して講義や実習の内容、時間、受講料などを研究員毎に示したリストをひとはく手帖に記載し、来館団体の便宜を図るなどの工夫がなされている。

特注セミナー数とそれに該当する館内講演数の推移を図3-2に示す。図の作成にあたり、2005年度以前は館内での依頼講演の総数を、2006年度以降は特注セミナー数と学校団体対応の講演・実習や地域研究員養成講座の総数の合計を、特注セミナー数として集計した。特注セミナー数は1999年度まで年間20～30件であった。2000年度から次第に増加し、特注セミナーが開設された2004年度以降は年間200件を超えた。2007年度以降にひとはく手帖で特注セミナーの詳細が紹介されるようになってからは、依頼を受ける講師数も増えた。これらは特注セミナーの実施効果であるが、来館団体数の増加には目立った効果が表れていない。来館団体の目的は展示見学であることが多いので、特注セミナーに加

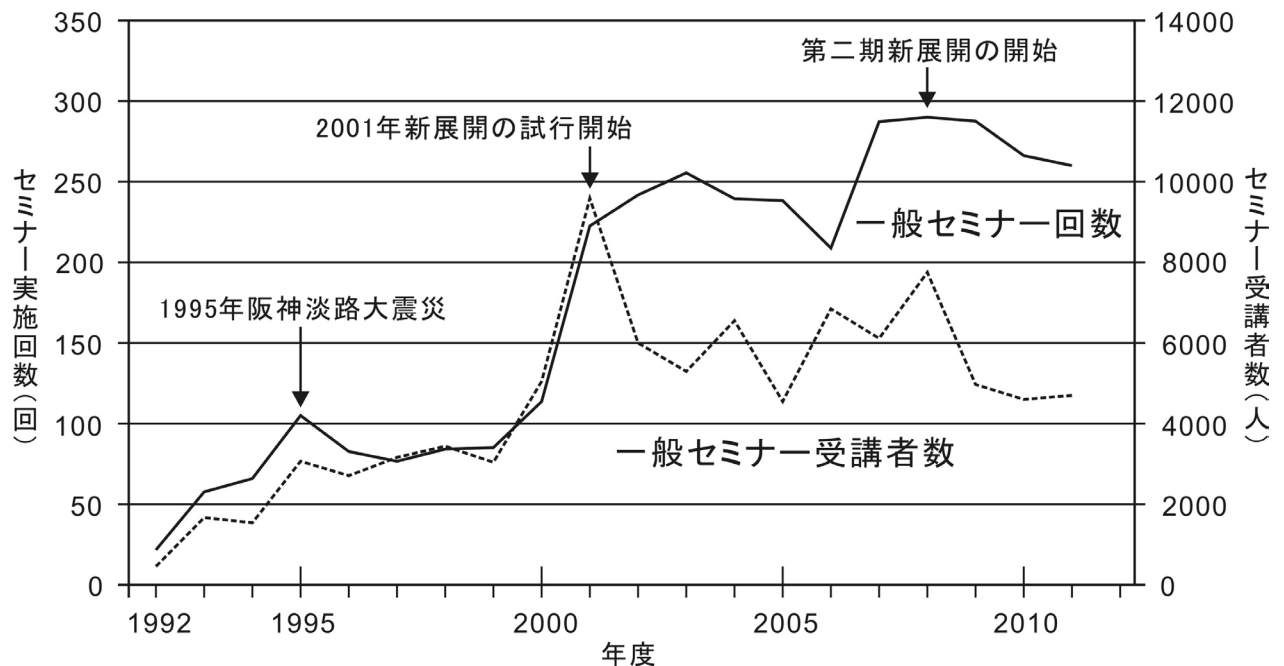


図3-1 1993～2011年度の一般セミナー開催回数と受講者数の推移

えて展示内容を興味深いものに更新していくことが、来館団体数の増加には必要条件になる。

#### (4) 館外講師派遣

館外講師派遣は、開館後に順調に増加し、1998年度には年間160件を数えた(図3-2)。2000年度の新展開検討期からは一挙に100件前後も増え、2004年度に年間300件を超えてからは、500件を超えた2008年度の例外はあるが、年間250～350件で推移している。このような館外講師派遣数の増加は、当初は少数の研究員の講演数の増加によるものであったが、新展開以後は講演依頼を受ける研究員数も増えている。これは、新展開の推進を通して人と自然の博物館や研究員の活動が広く知られるようになったことや、開館後10年を経過して中堅・若手研究員が成長し、館外からの講演依頼を受けられる能力と知名度を得てきたことなどによる。

これに対して2004年度以降の安定ないし漸減傾向は、博物館業務の多様化と業務量の増大、研究員の高齢化により、館外講演の受容能力が減少したことを示唆している。一般セミナーの集客や特注セミナー・館外講演の依頼は、研究員の魅力や講演能力に依存することから、研究員は新しいコンテンツを生む研究・調査・教育活動を充実させることが求められる。第二期新展開以降には、要望に応じて特注セミナーを館外の学校等で実施する「館外特注セミナー」を取り入れ、

研究員の館外講演の機会を増やす試みも続けている。

(加藤茂弘、池田忠広)

### 3. キャラバン

ひとはくは平成13年度に新展開の方向性を確定し、新しい運営計画に基づく活動を開始した。そして、平成14年度には、新展開を象徴する新たな取り組みとして、また、開館10周年を記念する事業として「ひとはくキャラバン事業—ひとはくがやってくる—」(以下、キャラバン事業)を実施した。本事業は、展示やセミナー、リサーチプロジェクト(市民参加型の自然環境調査)などの各種プログラムをパッケージ化し、これを館外で展開するというものである。開催地の県民局、市町、地元住民などと協働体制を組むことが本事業の最大の特徴である。平成13年度以前のひとはくにはこのような事業の実施経験がほとんどなかったが、館外の多くの方々のご協力により、平成14年度には県内10地域でキャラバン事業を展開することができた。本事業は平成15年度以降も毎年継続して実施することができ、現在に至っている。平成14年度から平成23年度までの実績を集計したところ、キャラバン事業の総プログラム数と総ビジター数はそれぞれ700件、100万人を超えていた。

ひとはくは開館以来、「人と自然の共生」を旗印に様々な活動をおこなってきたが、キャラバン事業はその中でも特に力を注いできた活動の一つである。このような事業を実施す

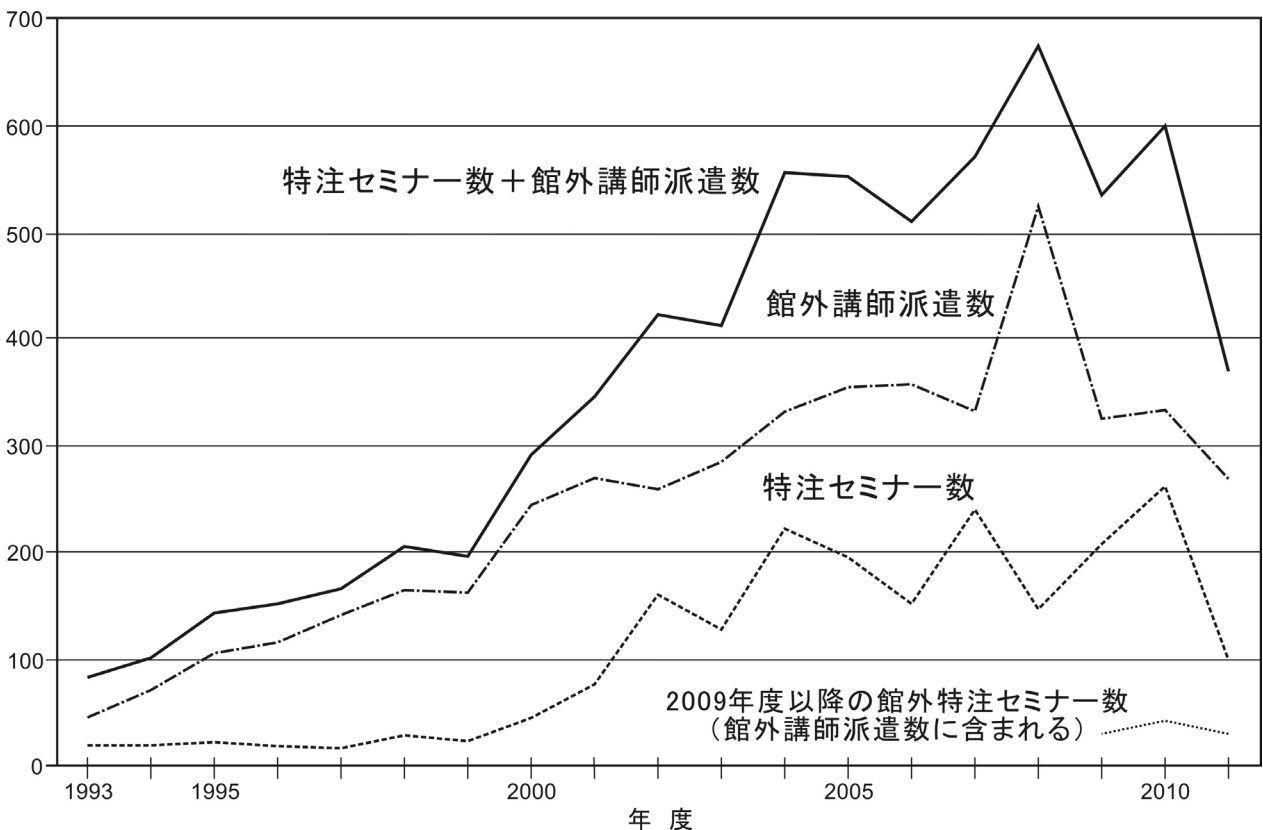


図3-2 1993～2011年度の特注セミナー数，館外講師派遣数とその合計数の推移

特注セミナー数は、2005年度以前は館内での依頼講演総数、2006年度以降は特注セミナー数、学校団体依頼の講演・実習数、および地域研究員養成講座の合計数とした。2009年度以降については、館外講師派遣数に占める館外特注セミナー数の推移も示した。

るに至ったのは、館員に共通して「ひとはくは県立の社会教育施設として広く県民にサービスを提供する必要がある、常設展示を中心とした館内サービスだけでは不十分である」という認識や、「地域の自然・環境・文化を未来へ継承するためには、館員が地域へ積極的に出かけて行き、地域との連携を強化・拡大し、地域での様々な活動に貢献する必要がある」という認識があったからである。これらの共通認識はひとはくの全ての活動の根底にあるものであるが、特にキャラバン事業においては大きな原動力となった。

なお、キャラバン事業には複数のタイプがあり、特定の目的があるものにはそれに応じた名称がつけられている。例えば、小学校から高校までの学校教育支援を目的としたものは「学校キャラバン」、未就学児を主な対象とする科学教育・環境教育の推進を目的としたものは「ひとはく Kids キャラバン」、山陰海岸ジオパークの普及啓発と活性化を目的としたものは「ジオキャラバン」、他施設・他団体の主催するイベント（フェスティバルなど）の支援などを目的としたものは「ミニキャラバン」と呼ばれている。

(石田弘明)

#### 4. 幼児期の環境学習支援

ひとはくは 1992 年の開館以来、環境学習支援に向けてさまざまな取り組みを行ってきた。とくに新展開以降は各種セミナーが飛躍的に増え、「ひとはく手帖」をご覧いただくその拡がりがよくわかっていただける。

しかし、そんなひとはくの生涯学習支援にも不十分なところがあることがだんだんと分かってきた。小学校低学年以下の小さな子どもたち（キッズ）に対する取り組みが十分ではなかったのである。それはセミナーの対象者に幼児が含まれているものが少ないことを見ればすぐにわかることではあるが、多くの研究員は、小さな子どもたちに自分の話がわかってもらえるはずがないと考え、自分自身がそうであったように、小さな子どもたちには関わろうとしてこなかったように思われる。

岩槻館長の言葉として「受精卵から墓場まで」というのがある。子どもが生まれる前から、亡くなるまで、その人の生涯を通じて博物館が関わって行きたいということである。ひとはくの一般セミナーが対象としはじめる小学校高学年からではむしろ遅く、長く博物館と関わり続けるための基盤をつくるには、できるだけ早いうちから、始めるべきだという考えである。胎児から 2 歳くらいまでは両親に対して、2 歳頃から小学校低学年頃までは親子で、小学校高学年以上では、本人に直接働きかけを行う。そして、保育所、幼稚園、小学校、から大学まで、保育、教育のさまざまな段階で、ひとはくが支援を行う。その支援を行うのはひとはくが直接の場合もあれば、後述する科学コミュニケーターなどの担い手の場合もある。

キッズに対する生涯学習支援の取り組みは以前から少しずつ進められ、2011 年の 1 月には「博物館と幼稚園・保育園

フォーラム」を開催するまでになっていた。そしてさらに本腰を入れるため、2011 年の 4 月から専門の部署として「キッズひとはく推進室」が発足した。2011 年度は、研究員 3 名、生涯学習課と総務課の職員が 1 名ずつに加えて非常勤職員 2 名の総勢 7 名でスタートし、2012 年度には、常勤の科学コミュニケーターを 1 名迎え、戦力の大幅アップを図ることができた。

キッズひとはく推進室はスタート当初、JST（独立行政法人科学技術振興機構）が募集していた先進的科学館連携推進事業に応募し、幸運にも助成金を獲得することができた。応募したテーマは「ゆりかごから科学を一幼少時からの体験に基づいた科学的好奇心育成の基盤構築と実践」であった。この助成金は最長 5 年継続することから、これまでのキッズ関連の事業を展開するに当たって大きな支えになっている。キッズひとはく推進室では、館内の他部署の支援を受けながら、キッズ向けプログラムの開発と試行を行い、同時に担い手となる科学コミュニケーターの育成も手がけている。ひとはくでは、科学コミュニケーターを「科学の面白さを他の人に伝えることができる人」ととらえ、児童館、幼稚園、保育所のスタッフや先生方、子どもたちの保護者など、さまざまな人に科学コミュニケーターとしての活動を担っていただくと考えている。

そして、科学コミュニケーターやさまざまな施設が緩やかなネットワークで結ばれ、キッズ向けの活動が自律的に進んで行けるような仕組みづくりを念頭に置いて、年度末にフォーラムを開催するなどの取り組みを行っている。

プログラムの開発、科学コミュニケーターの養成、ネットワークの構築など、の取り組みを具体的に進める場としてキッズキャラバンを数多く実施している。キッズ向けプログラムは、キャラバンの場で試行し、継続的に改良を加えることができる。そしてキャラバンを実施するに当たっては、先方のスタッフとの間で、プログラムの中味まで共有できるように、事前の研修が行われ、当日もできるだけ一緒にやっていただけるように働きかけている。2012 年度に宝塚市の児



写真 3-1 キッズひとはく推進室事業の 1 つ「ひとはく Kids 館長」

児童館で実施したキッズキャラバンでは、宝塚市の高齢者大学（いきいき学舎・フレミラ）の2年生と卒業生を対象に、「いきいきキッズキャラバン隊」を募集し、最初は何度かのキャラバンに参加していただくことから始め、次第に自分たち自身でプログラムの企画から実施までできるようになっていたところとしている。

親子を対象とした取り組みとしては、2012年度から毎月第一日曜日を「キッズサンデー」とし、キッズ向けプログラムを集中させて、近隣の幼稚園にチラシを配るようになっている。このキッズサンデーでは、博物館が親子で気軽に来館できる場所だということを多くの方々に知っていただくことをねらいの一つとしている。

また、特定の親子と「濃い」関係を結び、博物館側から特別なサービスを提供する一方で、モニターとしての役割を果たしていただく「Kids ひとく大使」の制度を、2012年度に開館20周年事業の一環として実施している。その結果、149名の応募があり、キッズサンデーの日に「キッズ館長」(写真3-1)そして館内を巡回するなどのプログラムが行われている。

キッズひとく推進室では年齢ごとに異なる幼児への対応の方法など、まだまだ手探り状態ではあるが、博物館好きな家庭で生まれ、小さな子どものうちから博物館に親しみ、自然の好きな大人になり、生涯を通じて博物館と関わりを持ちながら、自然と親しみ続ける、そんな人々を少しでも増やして行くことが、これからのひとくにとって重要なことと考え努力している。

(古谷 裕)

## 5.学校支援

### 1) 団体対応

この項では団体対応について述べるが、後述される「7. 来館者サービス」にも詳しく書かれているので、両方を照ら

して目をとおしていただきたい。

開館以来の年度ごとの総入館者・一般団体・学校団体については表3-8、図3-3に示すとおりとなっている。なお、開館初期（1992年度から1998年度）の入館者集計システムでは来館団体数の集計を行っていなかったため数値が欠落している。来館団体総数は1999（平成11）年以降、2008（平成20）年度をピークに減少傾向にある。内訳をみると、一般団体数は1999（平成11）年度から2002（平成14）年度にかけては増加しているが、その後は約500団体で横ばい傾向となり、2008（平成20）年度以降は減少の一途をたどっている。一方、学校団体については1999（平成11）年度から2003（平成15）年度にかけては約200団体で推移、それ以降から2010（平成22）年度にかけては増加傾向に

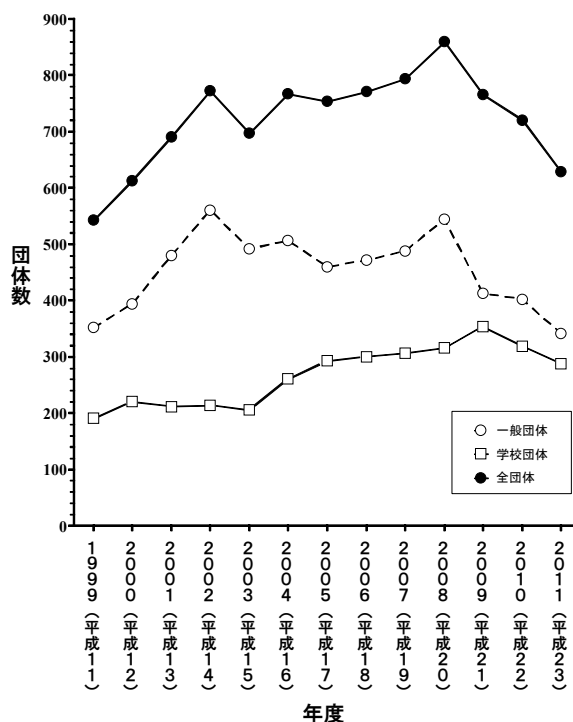


図3-3 来館団体数の推移

表3-8 来館団体数の推移（1999年以前については詳細な記録が残っていない。）

年度	一般団体				学校団体数				合計	
	団体数	構成比	人数	構成比	団体数	構成比	人数	構成比	団体数	人数
1999 (平成11)	352	64.8%	17,706	37.8%	191	35.2%	29,087	62.2%	543	46,793
2000 (平成12)	393	64.1%	17,793	36.6%	220	35.9%	30,869	63.4%	613	48,662
2001 (平成13)	479	69.4%	26,137	45.4%	211	30.6%	31,386	54.6%	690	57,523
2002 (平成14)	560	72.4%	30,465	50.6%	213	27.6%	29,774	49.4%	773	60,239
2003 (平成15)	492	70.6%	27,220	47.5%	205	29.4%	30,107	52.5%	697	57,327
2004 (平成16)	506	66.0%	26,366	42.5%	261	34.0%	35,708	57.5%	767	62,074
2005 (平成17)	460	61.1%	25,371	39.2%	293	38.9%	39,374	60.8%	753	64,745
2006 (平成18)	471	61.1%	24,252	35.8%	300	38.9%	43,574	64.2%	771	67,826
2007 (平成19)	488	61.5%	29,327	39.7%	306	38.5%	44,514	60.3%	794	73,841
2008 (平成20)	544	63.3%	28,563	37.6%	316	36.7%	47,475	62.4%	860	76,038
2009 (平成21)	412	53.9%	16,776	33.6%	353	46.1%	33,143	66.4%	765	49,919
2010 (平成22)	402	55.8%	17,858	38.1%	318	44.2%	28,994	61.9%	720	46,852
2011 (平成23)	341	54.3%	14,886	35.9%	287	45.7%	26,614	64.1%	628	41,500
平均	454		23,286		267		34,663		721	57,949

あったが、以後減少傾向にある（図 3-3）。構成比でみると開館当初は学校団体は来館団体の 3 分の 1 程度であったが、近年の学校教育支援のためのサービスを強化したことで学校団体が多く来館するようになった。ただ、団体数として捉



写真 3-2 これまでに発行してきたワークシート類



写真 3-3 以前の「セミナーガイド」



写真 3-4 現行のひとほく手帖

えた場合は増加しているが、人数で捉えると、常に 3 分の 2 程度となっている。（表 3-8）

開館当初、来館団体にはミュージアムメイトがセミナー室までの案内とオリエンテーションを行い、学校団体にはひきつづき学習推進員が展示解説を行った。学習推進員は普及課の学校教育支援に関わるスタッフで、退職したベテランの教員が非常勤職員として雇用された。学習推進員は学校週 5 日制の導入に伴い、1995 年から土曜日に小学生を対象とした子ども理科教室などのセミナーを開始した。2000（平成 12）年度からは学習推進員の呼称はミュージアムティーチャーと変更され、雇用形態も非常勤嘱託から派遣となった。ミュージアムティーチャーは館主催の事業であるミュージアムスクール・ミュージアムハイスクールの講師や、夏季教職員セミナーの講師をはじめ、来館された児童・生徒に対する解説や指導などを担ってきた。またスタンプラリーやチャレンジシートなど、館内展示をフォローするワークシート類（写真 3-2）の作成等にもかわり、学校教育支援に取り組んできた。

ひとほくでは講座・セミナー・企画展等の情報をお伝えするために、リーフレット「もよおしのご案内」を発行してきた。しかし 2000（平成 12）年頃までは、講座の数も少なく総ての講座を紹介するには数頁のリーフレットで十分だったが、研究員が年間に何本もの講座を実施するようになった 2001（平成 13）年度からは、A4 サイズの小冊子「セミナーガイド」（写真 3-3）の体裁をとり、ページ数も 70 頁に増加した。20 世紀から 21 世紀にかけてひとほくも大きく飛躍したといえる。

2004（平成 16）年度からは、現在のように A5 サイズの「ひとほく手帖」（写真 3-4）の体裁をとるようになり、2007（平成 19）年度に初めて「特注セミナー」が設けられ、来館団体専用のセミナーとして、来館団体の要望に応じて特別に内容がカスタマイズされるようになっている。特に学校団体に対し、総合的な学習の時間、あるいは環境体験学習などの一環として、学校の実態に対応したセミナーにするため、事前に講師と学校の先生方で打合せを行うなど、個別に対応できる体制を整えた。2011（平成 23）年度には年間で 300 を超える特注セミナーを実施するなど、特注セミナーの開催は来館団体に対するサービスの質の向上に寄与しているといえる。

（八尾滋樹）

## 2) 講師派遣

自然・環境に関する様々な問題を解決したり、生涯学習を支援したりするため、当館は行政や各種団体からの要請に応じて、授業や、講演会、セミナー、シンポジウム等へ専門領域や講演可能なテーマなどに合わせた研究員を講師として派遣している。派遣の要請は、知人や研究者のつながりで研究員に直接される場合と、生涯学習課への問い合わせを経てなされる場合がある。

表 3-9 に、館報を元に集計した講師派遣先別の派遣件数を示す。最初の 9 年(1992～2000 年)については、館報に「講師派遣」という項目がなく、外部講師派遣の大半は「シンクタンク」の項目で扱われていた。また、キャラバンなどの共催事業の際に、共催先からの要望に応じて実施したセミナーなども講師派遣と考えられることから、それらについても集計している。

後半の 11 年(2001～2011 年)については、「講師派遣」は「学校教育支援」の一項目として扱われ、その内容は主に子どもたちに直接話をする場合と、親や教員などの成人を対象としたセミナーの二つに大別されていた。

(大谷 剛)

### 3) トライやる・ウィーク

1995(平成 7)年の「阪神・淡路大震災」、それに続く 1997(平成 9)年の「神戸児童殺傷事件」をターニングポイントに、パラダイムシフトが起きた。

「生きる力」を育む教育の充実をはかってきた兵庫県教育委員会では、こうした社会課題を背景に「心の教育緊急会議」を設置し、さまざまな提言の中から、活動や体験をとおして子ども達一人一人が自分なりの生き方を探す具体的な事業として「地域に学ぶトライやる・ウィーク」を実施することとした。

トライやる・ウィーク試行実施の初年度 1998(平成 10)年、時を同じくして、ひとくでは「第 1 回ボルネオジャングル体験スクール」が実施される。「ボルネオの熱帯雨林の原生林での体験をとおし、現代の子ども達に野生の力、生きる力を取り戻させたい。」という河合雅雄元館長の強い願いが具現化された事業であるが、この 2 つの事業は全く異なる形

でひとくはのめざすべき方向を示しているといえる。

トライやる・ウィーク事業は、生徒の主体性を最大限に尊重して実施されるものであり、受け入れ先も生徒自身の希望で選択する。基本的に体験希望の中学生は全員受入可能であり、トライやる・ウィーク初年度は 9 校 169 名を受け入れた。以降これまでの受入状況は表 3-10 のとおりとなっている。

三田市 8 中学校を含め、比較的近距離の神戸市北区・宝塚市内の中学校からの希望者と、恐竜化石発見の頃から丹波市・篠山市内の中学校からも体験希望者がある。

受入時期は、各中学校の実施期間により春季と秋季の年 2 回あり、各季にはそれぞれに前半と後半があるため、のべ期間は 4 週間となる。生徒たちは主に 5 つの研究部(系統分類、環境計画、生物資源、地球科学、生態研究)に分かれてそれぞれに活動する。

活動内容は研究部によってさまざまだが、研究員が日常行っている資料整理の補助作業や屋外に出て昆虫を採集し、研究員の指導を受けながら中学生自身が昆虫標本を作製し、博物館の標本資料として正式に登録することもある。またひとくはの有する収蔵庫内での標本整理の補助なども行っている。

研究部での体験活動に加えて、総務課や情報管理課、生涯学習課を体験することもある。総務課職員の指導を受けながら設備管理の作業の補助や、花壇の球根の植え替えなども時期により体験する事が出来る。情報管理課では、主に図書に関する活動があり、普通の学校とは比較にならないほど専門的な図書、洋図書を所蔵する図書室で、データベースへの図書登録作業など、図書館司書のような業務を体験する。生涯学習課担当では、フロア業務の体験がメインになり、フロア

表 3-9 派遣先別講師派遣数の推移(館報を元に集計)

年度	派遣先							小計
	県・市・町関連	学校 (小・中・高)	保育園・児童館等	学会・研究会・ シンポジウム	大学公開講座	公民館・昆虫館・ 博物館等	その他の団体	
1992	5	1	1	4	0	0	5	16
1993	13	5	1	1	4	3	7	34
1994	6	3	1	1	1	4	6	22
1995	6	2	2	0	0	5	6	21
1996	8	5	3	3	0	3	22	44
1997	63	6	1	3	3	5	57	138
1998	51	2	2	2	2	6	73	138
1999	36	7	0	1	1	4	71	120
2000	33	4	0	5	3	9	89	143
2001	0	9	0	0	0	1	1	11
2002	3	21	0	0	0	3	3	30
2003	0	26	0	1	0	0	5	32
2004	0	41	0	0	0	1	2	44
2005	1	28	0	0	0	2	11	42
2006	5	34	0	0	1	0	9	49
2008	0	18	0	0	0	0	2	20
2009	0	29	0	0	0	0	5	34
2010	1	31	1	0	0	3	6	42
2011	0	33	0	0	0	0	5	38
小計	10	261	1	1	1	8	48	342



スタッフの指導により、デジタル紙芝居やオープンセミナーなどによる来館者対応を体験する。また予約団体の誘導などをすることもある。

ひとはくでトライやる・ウィークを体験したほとんどの中学生は、「あいさつの大切さが分かった。」「働くことの大変さがわかった。」「時間を守ることの大事さを教えてもらった。」という感想に加えて、「今まで思っていた博物館とは全く違っていった。」「こんな仕事があることが初めて分かった。」「博物館の裏側を体験出来た。」「標本の重要性が分かった。」などの感想があり、トライやる・ウィークを通して中学生が博物館の存在をより詳しく認識していることがわかる。

将来的にもこうした学校支援をとおして、変化する社会状況に対応し、ひとはくの描く将来ビジョン、生涯学習院の実現に努めていく予定である。

(八尾滋樹)

#### 4) 学校連携セミナー

1996（平成8）年、生涯学習社会の実現と充実を推し進めるため「地域における生涯学習機会の充実方策について」の答申が文部大臣に提出された。その中からは、「社会に開かれた高等教育機関」と「地域社会への貢献」、「地域社会に根ざした小・中・高」と「地域社会の教育力の活用」、「地域のニーズに応える社会教育施設」と「多様化・高度化する学習ニーズへの対応」、そして「生涯学習に貢献する研究施設」と「多様な学習機会の提供」がキーワードとして読み取れる。こうした時代背景に呼応するように、ひとはくでも近隣の学校教育機関と連携し、博物館の物的・人的リソースの有効な活用方法を探るワーキンググループが発足した。そして2000（平成12）年には、学校教育支援の具体的な事業の一つとして、第1回学社融合シンポジウムも開催され、学校と博物館がより連携して取り組むための問題点や展望等が議論された。

表 3-10 トライやるウィークの受入状況

受入年度	受入校数	受入生徒数
1999	7	48
2000	7	45
2001	6	36
2002	5	25
2003	8	47
2004	8	40
2005	8	23
2006	11	33
2007	13	32
2008	16	39
2009	14	37
2010	15	25
2011	14	24
2012	12	28

2001（平成13）年の1年間の試行期間を踏まえ、2002（平成14）年から「新展開」が具体的に実行され、学校も完全学校週5日制となり、学校・家庭・地域の連携がさらに求められてきたことなどから、さらに学校教育支援を充実させる取組が推進されるようになった。

こうしたなか、兵庫県独自の事業として、高校生の学習機会を拡大することを目的にした「高校生 学びのネットワーク推進事業—ハイスクール・CORE・プログラム—」が推進されることとなった。その一環として2003（平成15）年5月、兵庫県立三田祥雲館高等学校との間で「連携講座の開設に係る協定」に調印し、講座を受講した学生に単位を認定する制度を創設した。社会教育施設と公立高校とのこうした連携は全国で初めてのケースであり、ひとはくの取組が全国的に注目されるようになった。同様に2006（平成18）年には、兵庫県立有馬高等学校とも「連携講座の開設に係る協定」に調印することとなり、両校ともに現在も継続して取り組んでいる。この高校連携セミナーは、当該校の生徒のみを対象にしたものではなく、一般の県民も希望すれば受講でき、ひとはく研究員による通常のセミナー同様に、専門的で高度な内容を学ぶことができる。同様に高等学校との連携では、2006（平成18）年からクラーク記念国際高等学校との間でも学校連携セミナーを開催していたが、諸般の事情により2011（平成23）年度をもって継続中止となった。

また中学校との連携事例としては、県立大学附属中学校プロジェクト学習がある。2007（平成19）年6月、自然や環境について強い興味・関心をもち、専門的な学習に取り組む能力と意欲を有する生徒の育成をめざして「総合的な自然・環境学習プログラムの研究開発・実践研究に関する協定書」を締結した。この協定に基づき、探究課題ごとにグルーピングされた中学生数名と研究員で、1年次から3年次までの3年間にわたりプロジェクト学習として実施している。

以上の学校連携は基本的に協定期間を単年度としているが、毎年期間延長更新の手続きをとり、継続して取組を充実させている。このことは、学校支援を経験する研究員を増やし、モチベーションの向上に役立っている。

ひとはくが有する資源として特筆すべきものの1つに情報管理システムがある。開館当初より館内の情報機器は光ファイバーを使った高速のLANによって有機的に接続され、パソコン通信のホストコンピューターはもとより、ファイルサーバ、データベースサーバ、展示情報サーバ、図書文献管理サーバ、メールサーバなど、博物館が自然科学に関する情報発信基地としての機能を果たすよう先進的に整備してきた。これらのシステムを学校支援・学校連携に活用した事例としてTV会議システムによる遠隔学習支援がある。2000（平成12）年度には、「竹筒トラップによるハチの生態調査」を題材に、茨城県から大分県までの8つの小中学校とTV会議システムをネットワークし、ひとはくの研究員や職員によるスクールパートナーチームとともに遠隔授業を実施してい

る。2006（平成 18）年にはドイツ・デュッセルドルフ日本人学校とも遠隔授業を実施した。

（八尾滋樹）

## 5) 博物館実習

博物館実習は、博物館法施行規則第 1 条に基づき、大学において修得すべき博物館に関する科目の一つとされており、登録博物館または博物館相当施設にて実施することとされている。

このことにより、博物館実習のうち館園実習の単位について、ひとくくりに実習を希望する学生を受け入れている。

館報による博物館実習の人数等の受入状況は表 3-11 のとおりとなっており、出身大学も北は北海道大学から南は琉球大学まで、全国各地の国公立私立の大学から学芸員資格取得をめざす学生を受け入れている。

所属については、北は北海道大学から南は琉球大学まで、全国各地の大学から学芸員をめざす学生が訪れる。

学生は 5 つの研究部のいずれかのコースに属して実習を行う。実習初日には、全体の共通オリエンテーションとして「実習のねらい」「日程説明」「館の概要説明（使命、経営理念、機能、役割等）」などの講義。これに続いて、各研究部担当研究員による「収集活動や収蔵・管理方法」、「管理システム及びその活用」に関する概要についての講義がある。また、実際にひとくくりにある収蔵庫（生物系収蔵庫・地学系収蔵庫・環境系収蔵庫・液浸収蔵庫）も視察する。

実際の実習は以前は 5 日間程度であったが、ここ数年は共通オリエンテーションも含め、コース別実習と来館者対応実習の両方をあわせて 10 日間の実習としている。

毎年の実習生受入は負担もともなうが、担当する研究部においては、定期的の実習生を指導することで基礎・基本の確認や、外部視点から日常業務を確認する機会にもなっており、

表 3-11 博物館実習生の受入状況

受入年度	受入校数	受入学生数
1997	4	8
1998	7	13
1999	6	10
2000	7	10
2001	7	10
2002	8	13
2003	13	18
2004	12	12
2005	12	12
2006	9	9
2007	7	7
2008	11	11
2009	11	17
2010	14	15
2011	12	15
2012	8	12

相互にメリットを活かせる機会ととらえている。

コース別実習では収蔵資料の整理保存作業はもちろんのこと、絶滅危惧植物の保全活動や里山林の管理作業などの実務を体験することで、博物館運営の実態を理解できるよう工夫している。また、展示作業や演示の準備、地域資源を活かしたフィールドミュージアム実習、アウトリーチプログラムを体験する事により、実際に実現可能な活動を自ら企画・立案できるよう工夫している。

一方、来館者対応実習においては、夏季に開催されている教職員・指導者向けセミナー期間に同調し、受付業務をはじめ、研究員によるセミナー実施にかかる準備作業（資料作成補助や IT 機器の準備など）、およびセミナーの司会進行役までこなすなど、教育普及事業や学芸業務以外の実務を体験することもある。またフロアスタッフの日常業務であるオープンセミナーやワークショップなどの企画・立案・実施を体験する事もある。

近年では、必ずしも学芸員志望ではない学生の受入もあるが、常に博物館に関する人材を育成する役割を有していることを自覚し、組織的に実習を受け入れる体制で供えている。

（八尾滋樹）

## 6) 教職員セミナー

学校教育支援プログラムの一環として、スクールパートナー推進事業『夏季教職員セミナー』が 2003（平成 15）年度から開設された。開館以来の旧体制から新展開による事業が推進される体制となり、研究員自らが事業室員を兼務し積極的に事業展開をすすめてきた。

組織改編により普及課の名称が「生涯学習課」になり、また、生涯学習支援室は「生涯学習推進室」や「スクールパートナー推進室」に生まれ変わって新展開を担うこととなり、具体的な事業の一つとして「夏季教職員セミナー」を実施することとなった。初年度には 13 講座を開設し、337 名の教職員が受講した。

初年度のセミナータイトルを一部紹介すると、「のぞいてみようミクロの世界」「びっくり動物の骨学」「標本づくり」「染色体の観察」「授業に役立つ校庭の植物観察」「チャレンジ！学校で使える植物画に挑戦」「植物の組織培養及びランの無菌苗種」「日本の平野が危ない」「博物館学校利用説明会」「あなたも挑戦してみませんか？デジタル教材づくり」「学校ジオトープの展開」「岩石・鉱物の見分け方」などが挙げられる。研究員の専門性を生かし、かつ、学校現場で活用していただけるよう配慮するため、5 つの研究部だけでなく生涯学習課や情報管理課指導主事も講座講師を務めた。

開設数は 2008（平成 20）年度の 30 講座がピークであるが、ほぼ 20 から 25 講座を毎年開設してきた（図 3-4）。また、一部の講座では兵庫県教育委員会指定の 10 年次経験者研修の講座も兼ねたり、独立行政法人科学技術振興機構主催の教員免許状更新講習を兼ねる講座も開設された。受講者数も 600 人を超える時もあったが、ほぼ 400 名から 500 名

で推移してきた（図 3-5）。

これら教職員セミナーは、一人でも多くの教職員に受講していただくため夏季休業中に設定しているが、学校現場の多忙さもあり、際限なく受講者が増加するということはない。また教職員セミナー当日の運営に際しては、博物館実習の学生や初任者研修に係る社会体験研修の初任者教員が補助を行った。

原則として、講座内容は理科での学習をはじめ、総合的な学習の時間や環境学習など学校の日々の教育実践に活かせるものを研究員がアレンジしたものを提供してきた。また総ての講座について受講後にアンケートを実施しているが、毎年 8～9 割の方から「大変適していた」「概ね適していた」との高い評価をいただいている。

また、2012（平成 24）年度から、従来の小、中、高等学校、特別支援学校の先生方に加えて、幼稚園、保育園（所）の先生方、学校で環境体験学習等を指導されている一般市民など教員以外の方も受講可能とした。キッズひとはく推進室の誕生の経緯は前述しているが、学校教育支援を小学校～高等学校に限らず、幼稚園児や保育園児を指導・保育される方々への支援の一つとし、「教職員・指導者セミナー」の名称にし、開催時期も夏季休業中に加え、秋季の数講座も含めより多くの方々を支援する方向を打ち出した。

（八尾滋樹）

## 7) 教材開発

### (1) JST 事業を活用した教材開発

ひとはくには専門的で高度な人的・物的資源は豊富にあるが、財源が潤沢にあるわけではない。そこで独立行政法

人科学技術振興機構 JST（Japan Science and Technology Agency）の委託事業（地域科学館連携支援事業）を導入し、2004（平成 16）年度は「調べてみよう身近な自然『ぷち校庭の樹木図鑑』」、2005（平成 17）年度は「身近な川の水生昆虫を調べてみよう！」、2006（平成 18）年度は「自然環境学習プログラム私のまちの環境マップをつくろう」を制作した。

樹木図鑑は、子ども達が学校の校庭という身近な自然に興味・関心をもつことで、学び舎再発見につながることをめざした図鑑のソフトウェアである。水生昆虫は、オンラインで水生昆虫を検索し図鑑で見ることができたり、水生昆虫から見た川の環境を学んだりできるソフトウェアである。また、そのまま印刷してフィールドに持ち出せるワークシートも開発した。そして環境マップは、身の回りにある環境について調べ、地点情報（緯度経度）、撮影した写真やその地点の種々の環境情報を編集することができるソフトウェアで、児童生徒が情報を直接入力しながら、分布や環境情報との関連を考察する「お手軽 GIS ソフト」としても活用できる。

「ぷち校庭の樹木図鑑」の制作には、スクールパートナー推進室、シンクタンク事業室が核となり研究員や指導主事、ミュージアムティーチャーのほか、県内の小・中・高等学校の先生方や関係する博物館等の専門家等も制作委員に参画していただいた。子どもにも簡単に操作できるよう、葉っぱの形や名前を入力して検索できるソフトウェアで、CD-ROM での提供に加えてひとはくのホームページからオンラインでも活用できる。同様に「身近な川の水生昆虫を調べてみよう」「私のまちの環境マップをつくろう」についても、生涯学習課、

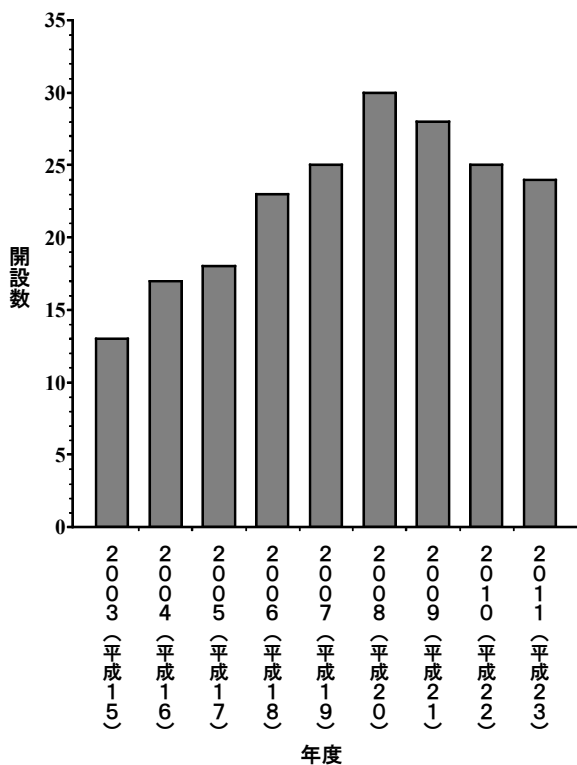


図 3-4 夏季教職員セミナー開設数の推移

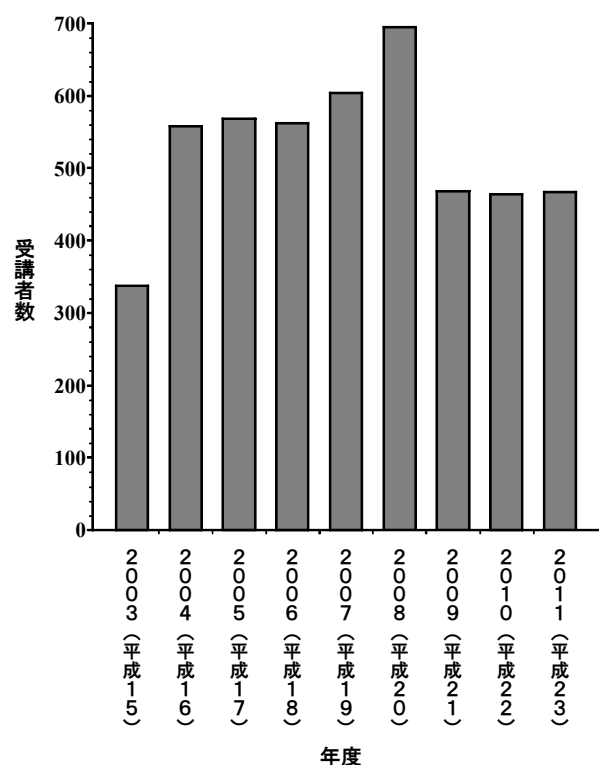


図 3-5 夏季教職員セミナー受講者数（のべ）の推移

スクールパートナー推進グループが核となり制作に関わり、オンライン検索でリアルタイムで活用したり、学習素材・教材としてワークシートやワークブックを印刷して活用したり出来るなど、様々なニーズに応えるよう工夫されている。

いずれの教材についても、関わった研究員等が夏季の教職員セミナーで講座を開設し、研究開発した教材の活用を促進するなど普及に努め、神戸市立糀台小学校や西宮市立山口小学校などでの実践事例はホームページでも紹介している。

このほか、JST 事業ではないが「子どもゆめ基金（独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センター）」からの助成金交付を受けて作成した「ビオトープシミュレーター」があり、オンラインを活用したゲーム感覚で、「地域の生物調査マップづくり」と「自然環境と生き物の関係性をシミュレーション」する学習教材などがある。

(八尾滋樹)

## (2) 実践事例集

ひとはくの有する豊富な学習資源を学校との協力のもとに活用することで、児童生徒が興味・関心をもって取り組み、「科学する喜びと感動」を味わってほしいという願いから、2004（平成 16）年度教材開発研究会を立ち上げ、理科離れ防止や総合的な学習の時間の展開を支援した。

教育のプロである県内の 22 の小・中・高等学校の先生方と専門性をもつひとはくの指導主事、研究員、ミュージアムティーチャーほか 23 名が一致団結し、共同で教材や学びの場を開発するだけでなく、実践へと発展させ、学校ごとの特性や地域の実態を活かしつつ、児童生徒の興味・関心に応じた学習プログラムを検討した。

表 3-12 実践事例一覧

学年	タイトル	テーマ
小学校	夢中に昆虫精密画	昆虫の教材化をとおして、子どもたちの科学を見る目（知的好奇心）を養う
	ミヤマアカネリサーチプロジェクト	博物館の支援を受けた総合的な学習
	科学的な探求・体験的な活動に根ざした実感を伴う環境学習	博物館と連携した「総合的な学習の時間」の支援
	たんぼの調査から河合小学校区的环境を考えよう	
	水辺の楽校にメダカをふやすには	人々が憩い、多様な生物が生息できる環境を守るには
	校区を縦断する東条川を軸とした環境学習	博物館と連携した「総合的な学習の時間」等の支援
	校区の森林・里山再生事業に学ぶ環境学習における一考察 環境と防災	博物館と連携した「総合的な学習の時間」の支援 武庫川がわたしたちに教えてくれたこと
中学校	メダカの保護活動を軸に地域の伝統工芸を融合させた環境学習 地域の貴重な自然を活用した授業づくり	博物館の専門家と連携して 博物館と連携して絶滅の心配のある「サギソウ」を守る
	宝塚市ヒートアイランド実態調査に関する調査研究 篠山市の希少な生き物の学習について	人と自然の博物館との協同教材開発 自尊感情をはぐくむ自然環境学習を目指して
小・中学校	地域の自然を取り入れた教材	武庫川流域の地学教材開発「川原の石図鑑」について

教材研究から授業展開に至るまで、学校は展示見学、標本作成などの実習、ミニセミナーの受講、ゲストティーチャーの招聘、TV 会議システムによる遠隔授業など、ひとはくの諸資源を有機的に活用し、教育的専門性と学術的専門性を融合させた。

その結果は、「学校と博物館でつくる新しい学習展開—自然から学ぶ実践事例集—」として同年度末に報告された。その実践テーマ 13 本を表 3-12 に示すが、総合的な学習の時間を対象にしたものが圧倒的に多いが、理科、図工、道徳に関するものなど多岐にわたり、また、児童生徒の興味・関心に基づく身近な地域素材が多く取り上げられ、社会の変化に対応したものであった。

(八尾滋樹)

## 8) 小学校 3 年生の環境体験学習

兵庫県では、小学校 3 年生を対象に、様々な体験活動を通じて命の大切さを学んだり、自然・環境への興味をもったり、地域の自然を大切にしようとする意識を高めたりすることを目的とした「環境体験事業（環境体験学習）」を行っている。この事業は、平成 19 年度から公立小学校から段階的に実施し、平成 21 年度から県下の全小学校を対象に実施するようになった。体験する場所は、里山、田畑、水辺など様々である。

ひとはくでは、日常的に館内外で学校対応を行っているが、環境体験事業の試行的段階から、それらを意識して対応してきた。具体的には、ホームページなどで事例を紹介するなど、現場の先生方が内容の検討がしやすいように情報を発信するようにした。また事前・事後の学習を含めて相談に応じるよ

うにした。

平成 23 年度の小学校 3 年生のひとはくへの来館学校の約 7 割 (53 校のうち 35 校) で特注セミナーを実施している。これまで実施されたテーマには下記のようなものがある。

＜実施されたテーマ例＞

「簡単!化石のレプリカづくり」「深田公園の昆虫」「昆虫のはなし」「トンボとりペナントレース」「昆虫ビンゴ」「昆虫 30 分トピックス」「ホタルのお話」「ひとはくで虫とり」「植物のはなし」「植物観察入門」「世界の木のはなし」「森について」「エドヒガン桜のはなし」「樹木の話と丸太切り体験」「葉脈標本しおりづくり」「葉っぱの学習」「深田公園の植物かんさつ」「クイズで学ぶ身近な自然の植物のこと」「兵庫県のかたつむり」「水辺の生き物とその暮らし」「川のしくみ」「水生生物について」

このように、テーマは化石、昆虫、植物、動物など多様であり、体験型のセミナーはもちろん、事前・事後学習としてのセミナーも含まれる。

(小館誓治)

## 9) ボルネオジャングル体験スクール

ボルネオジャングル体験スクールは、小学 6 年生から高校生までの児童生徒約 30 人が、夏休み期間中に 7 泊 8 日でボルネオ島のマレーシア・サバ州を訪れ、生物多様性の高い熱帯雨林での生活を体験しながら、熱帯特有の生き物観察や現地中等学校の生徒達との異文化交流を行う現地体験型学習プログラムである。

人と自然の博物館は 1997 年 6 月にマレーシア国立サバ大学と学術交流協定を締結し、世界で最も生物多様性が高い地域の一つであるボルネオ島の熱帯雨林を保全するために、両者が共同で調査研究や普及教育に取り組むこととした。当時、当館の河合雅雄館長は、子どもの理科離れ、自然離れを危惧し、子どもに感動を与え生きる力を賦活するためには、大自然の中に身をおき、自然が見せてくれる不思議や驚きの世界にふれることが大切であるとして、子どもたちを熱帯雨林のような大自然に連れ出すことを考えていた。そこで当館は、サバ大学の協力の下にボルネオジャングル体験スクールを企画し、子どもたちに本物の熱帯雨林を体験させる活動として 1998 年に本事業を開始した。以来現在まで 15 年間、感染症 SARS のために 1 回中止になったことを除けば、ほぼ毎年実施してきて本年が 14 回目のスクールとなり、これまでに 300 名を超えるスクール卒業生を送り出してきた。

訪れる場所はサバ州ダナムバレー自然保護区の熱帯雨林である。現地の中等学校の生徒数名が合流して 4 日間一緒に熱帯雨林のなかの宿舎で生活する。高さ 50m を超えるような樹林の中を歩いてオランウータンなど熱帯特有の動物に出会い、板根や絞め殺し植物を観察するなど、本や映像でしか見たことのない熱帯雨林の生き物を、自分の目で見て触る体験により本物の熱帯生態系を学ぶのである。またマレーシアの生徒たちとの共同生活により異文化に触れたり、小・中・

高校生の異年齢集団で行動するなど、子どもたちは非日常の一週間を経験する。

本事業の目的は、日本の子どもたちに世界有数の貴重な原生林が残っているボルネオ島の熱帯雨林を実体験させることにより、大自然のすばらしさに感動するとともに、現地の人々と交流し友好関係を深め、自然や人を大切にしながらたくましく生きる子どもたちの育成を推進しようとするものである。

自分の目や足で探さないといけないうジャングルでの体験や、自分からコミュニケーションをとらなければ成立しないマレーシアの人たちとの交流は、子どもたちが本来持っている好奇心や想像力、積極性などを引き出す効果があり、子どもたちの自主性や創造性、責任感を生み出しているといえる。多感な年代の子どもたちにとって強いインパクトのあるこの事業での体験は、自らの将来について考えさせる効果もあり、実際に多くのスクール卒業生が、ジャングルスクールでの実体験をきっかけとして生物学や環境科学分野、国際関係や英語を学ぶ分野の大学・大学院等へ進学し、また社会人となって多方面で活躍している。このように本事業は子どもたちに様々なよい効果をもたらしている。

(高橋 晃)

## 10) イベント

### (1) 夏休み理科相談室

1992 (平成 4) 年度から学校では毎月第 2 土曜日を休業日とするようになり、1995 (平成 7) 年度からは、第 2・第 4 土曜日が休業となった。これにより、教育関係者の中では「家庭や地域等と連携し、休業となる土曜日の受入体制を創り出さねば。」という動きが出てきた。

こうした社会体制を背景に、ひとはくでは 1995 (平成 7) 年度から普及課学習推進員を中心に、小学校 4 年生から 6 年生までを対象とした講座「子ども理科教室」を新設した。子ども達が自然や科学とふれあい、人と自然の関わりについて深める体験型の講座として 2000 (平成 12) 年度まで実施した。

また、この定期的な体験型講座とは別に 1997 (平成 9) 年度からは、小・中学生を対象に、夏休み等に採集・観察した植物や昆虫、鉱物、化石などについての鑑定と相談を行う「夏休み子ども相談室」を開催した。各研究部から研究員が講師として参加し、多くの子ども達で賑わった。

2002 (平成 14) 年度から完全学校週 5 日制となり、ひとはくでは 2004 (平成 16) 年度から学校の夏休み期間中を無休開館とし、子ども達がいつでも来館できるよう門戸を広げるとともに、「夏休み子ども相談室」を 2～5 日間の複数日を設定、「夏休み理科相談室」(写真 3-5) としてリニューアルし 2007 (平成 19) 年度まで実施した。来館した子ども達に対し、各部からの研究員とミュージアムティーチャーが相談に応じ、夏休みの自由研究などの支援を行った。

(八尾滋樹)

## (2) 三田市中学校理科作品展

「三田市中学校理科作品展」(写真3-6)は新展開に伴う県民や団体、NPO等との連携による事業の充実化の一環として2001(平成13)年度から始まった。連携相手は、三田市教育委員会をはじめ三田市内の各中学校の理科担当教諭で構成される「三田市中学校理科研究部会」で、ひとはくは主に夏季休業中に中学生が取り組んだ理科作品の展示場所を提供しているほか、2007(平成19年)年度からは「ひとはく賞」を設け、展示期間中に研究員や館員が作品を審査し、優秀な作品に賞を授与している。展示期間は、毎年およそ9月の下旬から10月にわたる4日間から8日間程度で、4階ひとはくサロンあるいは3階の通路ギャラリーを利用している。地味であるが具体的な学校支援の事業として、2012(平成24)年度の現在も継続して開催されている。

(八尾滋樹)

## (3) サイエンスショー

兵庫県教育委員会では、2003(平成15)年度から、理科教育に携わる教員の指導力を高め、児童生徒の理科に関する興味・関心を喚起するとともに、発見や驚き・楽しさなどを体験することによって、豊かな感性や情操を培っていくことをねらいとする「理科教育推進事業(いきいきサイエンス推進プラン)」を実施した。

ひとはくではこの事業の一環として、高等学校・大学や科

学博物館等と連携協力し、「サイエンスショー」を実施、不思議な観察、楽しい実験、面白い実験など、23のブースに2,000人を超える参加者を得た。小・中・高校の先生方にもアシスタントとして応援していただくなどの運営の工夫によって多数の子どもが参加でき、開催の継続を望む声が多く聞かれた。

実施初年度は、ひとはくフェスティバルと同日の11月3日に開催、この日は無料開館の日で関西文化の日としても設定された。翌2004(平成16)年は、ひとはくフェスティバルと別日の開催となったが、出展者も増え、27のブースと5つのワークショップとなり参加者数も増加した。

しかし、参加者からの「より多くのブースで体験するには1日では難しい。」との声に応え、3年目の2005(平成17)年からは11月・12月・2月の年間3回の開催としたことにより、10,000人を超すなど劇的に参加者が増加した。さらに、2007(平成19)年には、出展者数は56にまで増加し、事業は2008(平成20)年度まで継続した。表3-13に主な出展ブースのタイトルを示す。

本事業のはじまりは、「ひょうご経済・雇用再活性化プログラム」からであり、経済の再生、人材の育成、雇用の創出、理数科教育の振興などの社会背景と、生涯学習支援としての県民ニーズに応えた学習の場の提供という、ひとはくのミッションが同調し、スクールパートナー推進事業として実施してきた。

ひとはくではサイエンスショーとして事業を継続しているが、兵庫県教育委員会のバックボーンは、理科教育推進事業

表3-13 サイエンスショーの主な出展ブースタイトル

出展ブースタイトル

カラフル浮沈子であそぼう!
分光シートの光の回折・干渉
ヘロンの噴水とメチレンブルーのふしぎ
直視カメラとピンホールカメラ
アセチレンロケット
台所でDNAを取り出そう
接着剤で動く船
ドラム缶つぶしー大気圧を感じようー
静電気であそぼう
復元しよう!むかしの生物ーおゆまるで化石のレプリカづくりー
フランクリンモーターを回そう
カタラーゼを語ろうぜ!ーナベ料理編ー
どこでも顕微鏡
爆発するアルコール
おいしい火山実験
聴診器をつくってみよう
切っても切ってもプラナリア
ドライアイスは楽しい
豆腐をつくろう
空気のおもしろ実験ショー&スーパーエアロケット工作
ブタの眼を解剖しよう



写真3-5 夏休み理科相談教室の様子



写真3-6 三田市中学校理科作品展の様子

(いきいきサイエンス推進プラン)、理数教育推進事業(ダ・ヴィンチ・プラン)、理数キャリア教育推進事業と変遷している。このことから、時代の要請にひとはくがいかに応えているかを示す好事例といえる。

(八尾滋樹)

#### (4) いきものかわらばん

発端は2009年度の冬、スクールパートナー推進室のフリーターキングの中で、「こども壁新聞」のようなものを子どもたちに書かせてみてはどうか、学校単位で募集したら面白いのでは、というアイデアが出てきた。「かべしんぶん」ではあまりにも在り来たりなので、江戸時代に新聞の原型となった「瓦版」を使うと、温故知新で新しい感覚、その名も「いきものかわらばん」。自分が感動した「生きものとの出会い」を「自分新聞」の形で書き、応募する。この応募のかたちは、2008年度に開催した「ファールにまなぶ」展(「昆虫記」刊行100年記念日仏共同企画)に合わせて募集した「ひょうごのファール、未来のファール」の経験・成功が元になっている。このときは兵庫県の各地から、「自分自身の観察や発見」、「とっておきの私の一品」などが寄せられ、廊下や展示室の一端で展示され、「ファールにまなぶ」展を盛り上げ、支えていったのではないだろうか。

#### 2010年度【ひとはくいきものかわらばん】

上のような経緯で、2010年度のスクールパートナーの仕事として敢行することになった。どのぐらい集まるか不明であったため、いろいろな伝手を頼って、応募を呼びかけたところ、締切り前日まではほとんど集まらなかった作品が集まりだし、200程度との予想を大きく上回って、818点という最終点数になった。館長賞・三田記者クラブ賞・研究員賞といった受賞作品はまさに「玉」と言えた。

#### 2011年度【第2回ひとはくいきものかわらばん】

応募総数は661点。予算が少ない中、2階展示スペースを利用した展示は完成し、ひとはくフェスティバルのステージでの表彰式、「共生のひろば」展での受賞作品の紹介、年が明けてからの返却と、前年の経験を活かして終了した。

#### 2012年度【ひとはくしぜんかわらばん2012】



写真3-7 2011年度のいきものかわら版作品展示

前々から「いきもの」に限定せず、地学関連の観察も取り込めないかという意見に基づき、「しぜんかわらばん」を採用した。応募用紙の裏面は「ひとはくキッズかわらばん」、未就学児童とその親との合作を開拓するという意図だが、担当する「キッズひとはく推進室」のエネルギーが感じられた。20周年の諸イベントの中で「かわらばん」イベントは、なるべく拡大路線をとらず、大量応募は抑えて、締め切ってみると、予想に近い352点。これに「キッズ」の46点を加え、398点が20周年記念イベント関連を避けた二階スペースにうまく収まってくれた。パナソニック株式会社のご協力を得て、新しい「パナソニック・バイオミミクリ賞」を10点設けることができたことは実に喜ばしい。ひとはくフェスティバルでの表彰式、「共生のひろば」展での受賞作品の紹介は前年を踏襲した。

(大谷 剛)

## 6. 広報

### 1) 広報の変遷

ひとはくの広報は、20年間で広報媒体の変化と館内組織の改編により大きく進展した。開館当初は、発信手段はポスター、チラシ、定期刊行物「博物館ニュース」「ハーモニー」であり、県教育委員会総務課や三田市広報課の定例記者発表における報道向けの情報提供が基本であった。また、企画展も定期的に行われ、広報を担当する普及課では研究員からの情報をまとめ、計画的に業務が行われていた。

#### 広報媒体の変化に応じた広報に

やがて、インターネットの普及と通信環境の向上、携帯電話、スマートフォンの普及により、広報の主体は紙媒体から電子媒体へと変化した。紙媒体では、企画→執筆→編集→校正→印刷→発送という手間と時間を要していたが、ホームページ、メールマガジンなどの電子媒体、地元FM放送となると、スピードが要求される中での正確さ、わかりやすさが求められる。広報を担当する生涯学習課では研究員とのやり取りが密になり、情報共有が普段から重要となる。ちょうどそれが、「新展開」での組織の改編により、研究員が生涯学習課員と一緒に事業室で机を並べて仕事をする事となり、実現可能となった。まさに、広報媒体の変化と館内組織の改編がタイミング良く一致したのである。

#### ひとはくにしかない広報を

事業推進会議はアイデアで満ちていた。計画的というより、思いつきの企画も多く、それらを広報するとなると時間をかけたやり方では通用しない。紙媒体の刊行物の発行頻度を上げる一方で、ホームページ等に頼るようになる。やがて、ブログで館員が随時書込みできるようになると更新頻度はさらに上がった。しかし、ひとはくの利用者はインターネット環境にいる人ばかりではない。紙媒体も欠かせないものであり、そこに、ひとはくの「顔」が見えないといけな。広報部門は外部発注せず、すべて自前なので館員がアイデアをしぼり、

厳しい予算の中でオリジナルの「ひとく手帖」「ひとく新聞」が生まれたのである。

## 恐竜効果でさらに幅広い広報に

「丹波竜」発見はセンセーショナルであった。それまでにない報道陣に囲まれ、記者発表も緊迫したものであった。しかし、広報にとっては全国に発信、インターネット上では世界に発信できる絶好の機会となった。紙媒体では発行部数という限界があるが、新聞、テレビ、各地の情報誌に取り上げられ、インターネット上でもニュース配信されると受け手の人数には限りがなくなる。こちらから売り込まなくても、情報を求めて取材に来ていただけるようにもなった。恐竜効果で、恐竜以外の研究活動にもスポットライトが当たるようになり、さらに生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）も追い風となった。

## 基本「定例記者懇談会」を大切にした広報を

2010年度から館内の情報共有がより一層スムーズになるよう事業室を超えて広報連絡調整会議を開いている。これにより、広報戦略を協議するだけでなく、毎月の地元記者向けの「定例記者懇談会」の内容が深まっている。記者に理解していただき、興味を持っていただくことが、1文字でも多い記事につながるのである。これからも広報媒体は変化しても、基本を大切に絶えず新しい試みも取り入れながら幅広い広報戦略を展開していかなければならない。

(平松紳一)

## 2) 印刷媒体

### (1) 館報

ひとくくの組織、年間の事業活動報告、個人別成果および関連する資料を網羅した冊子として、1992年の開館時から継続して年1回発行されている。1996年からは、それまで別の冊子として掲載していた施設概要についても、館報に盛り込まれている。編集については、当初は主に総務課が担当していたが、新展開以後は企画調整室が担当している。

### (2) 情報誌

#### 準備室ニュース

博物館の準備室時代の情報誌で、1989年12月に第1号が発行されて以降、1992年3月までに第6号まで作成された。8ページにわたるB5サイズの紙面に、博物館の開館に向けての準備状況や職員紹介のほか、外部の識者からの寄稿が掲載された。編集は、研究員が担当していた。

#### ハーモニー

1992年の開館に合わせ、同年7月に創刊号が発行された。当初の紙面構成は概ね準備室ニュースを継承していたが、1994年発行の第7号からA4サイズに変更され、文字を大きくするなどの読みやすくする工夫が施された。内容としては、研究員の研究テーマの紹介など、比較的専門性が高く、読み物としての傾向が強い。年4回の発行で、2007年3月までに第56号まで作成された。編集は、普及課(生涯学習課)と研究員が分担して行っていた。

## ひとく新聞

ハーモニーのリニューアル版として2007年6月から始まり、以降は年4回の頻度で発行されている。読者がより手に取りやすい情報誌となるよう、紙面をA3サイズに拡大し、レイアウトも大幅に変更された。また、ハーモニーの内容が比較的専門性の高く読み物的であったことに対し、ひとく新聞は、博物館の最新の活動情報を提供することを趣旨としている。編集は、生涯学習課を主体に、広報・出版支援マネージャーなど生涯学習推進室の研究員も加わって行っている。

### (3) ひとく手帖(セミナーガイド)

2004年より一定程度統一した体裁で年1回発行されているセミナーガイド。これ以前は、企画展とセミナーをまとめて紹介する「もよおし案内」のパンフレットが作成されていたが、統一の体裁はなかった。セミナー数が少なく予算もある程度潤沢であった当初は、「成人」や「小学4～6年生」といった対象ごとにセミナーが整理されていた。現在のひとく手帖では、研究員ごとにセミナーが紹介されているほか、当年度の目玉事業や年間カレンダーが掲載されており、年間を通じた博物館の活動予定を把握することができる。なお、2009年からは広告協賛金により発行が支えられている。編集は、生涯学習課が全面的に行っている。

### (4) うきうきカレンダー(館内イベント案内)

2005年から毎月発行されている館内イベント案内で、紙面の企画および作成はフロアスタッフに一任されている。

(上田萌子)

## 3) WEB媒体

### (1) ホームページ

#### ミュージネットHYOGO開設

「博物館展示は、現地を訪れて、見るもの。」その概念を破ったのが人と自然の博物館の運営するパソコン通信「ミュージネットHYOGO」である。当時の代表的なパソコン通信のサービス大手としては、アスキーネット、PC-VAN、NIFTY-Serve、日経MIX、People、ASAHIパソコンネットなど、懐かしい名称が挙げられる。

ミュージネットHYOGOは、人と自然の博物館がホスト局となって設置するパソコン通信のシステムで、自宅など、博物館の外から博物館の情報を利用したり、研究員と会員、さらに会員同士が意見交換ができた。さらに、催し物案内や日頃の疑問に研究員が答えるQ&A、収藏品データベース検索も行えるシステムを構築した。そしてなんとといっても自慢は、パソコン通信による収藏品の画像提供は、国内の博物館では初めてのサービスであったことである。パソコン通信の全盛期は1990年代の前半までと言われており、まさに時代の流れに即応する・時代を先取りする当館を象徴するサービス(例え)のうちの一つと言えるだろう。

だが、断っておくが、画面は今と違って表示されるのは「モニターに文字だけ」というのが基本スタイル。速度といい伝



達できる情報量といい、今のインターネットしか体験していない人には想像できないシステムだった。開設初期の会員数は400名弱、最終的には約3倍にまで拡大したが、インターネットの普及に伴い2000（平成12）年度にパソコン通信による情報提供はその役目を終えた。

#### インターネットのホームページ開設

1995（平成7）年Windows95が発売されると、インターネット接続機能も標準で備わり通信環境の設定が格段に簡単になったことや、パソコンの普及率が急激に伸びたことに対応し、1996（平成8）年度からインターネット・ホームページによる情報発信へと暫定的に切り換えた。開設時のURLは<http://www.nat-museum.sanda.hyogo.jp>であったが、愛称「ひとはく」に呼応して2001（平成13）年からは、より気軽にアクセスできるよう<http://hitohaku.jp>に変更された。

開設初年度のアクセス件数は、年度途中からではあるが12,402件、1997（平成9）年度は29,926件。その後順調にアクセス件数は伸び2011（平成23）年度には年間212,557件にまで増えてきた。

（八尾滋樹）

#### (2) メールマガジン

「ミュージアムレター」2000年6月創刊（2007年3月 No.1-80 配信）

電子メールで届ける「メールマガジン」（メルマガ）を広報ツールとして活用しようと、2000年6月から、メール配信サービス「まぐまぐ」経由で発信開始した。ボリュームはA4 2ページ程度。

手軽に発行できる仕組みとして、「まぐまぐ」は大変便利で、当時の内閣のメルマガなどが流行していた背景もあり、推進することになった。当初1,000人足らずの読者数が、5年ほどは順調に伸びていた。しかし、6年目以降微減の傾向がみられるようになった。

「ひとはくレター」2007年5月創刊（2013年3月末現在配信中 No.1 - No.71）

①読者が減少している、②読者の顔が見えない、などの理由からシステムの更新をおこなった。ひとはくにあったシステムを開発し、独自のサーバからメルマガを2007年5月から配信することとなった（Nos.1-2のみ移行期間として「まぐまぐ」からも配信）。「まぐまぐ」で初期に獲得した不特定の広い層の方に加え、新たにセミナー倶楽部会員が確実にメルマガの読者としてエントリーされ、ひとはくからの情報を届けることができた。創刊当時、メルマガ読者の80%は関西圏在住で、うち兵庫県が50%ぐらいだった。現在は月1回送信、読者数は約1,500人を超える。うち90%以上が兵庫県在住の方である。

（小林美樹）

#### 4) 電波媒体（ハニー FM）

ひとはく博士のラジオプチセミナーは、2003年4月5日

から2007年3月31日までの5年間、兵庫県三田市を主なエリアとする地元のコミュニティFM放送局より、毎週土曜日11時5分から10分間、人と自然に関する内容で人と自然への共生への関心を高め博物館に来館していただくきっかけづくりを目的として、親子、ファミリーを対象に毎週人と自然の博物館の研究員が博士として出演し、楽しい話題を提供してきた。

毎週博士がサウンドクイズを出し音（鳴き声）を流しその音（鳴き声）が何の音かリスナーに答えていただくクイズは、虫や鳥の鳴き声はもちろんのこと、博物館の展示を紹介した木を叩く音や、阪神・淡路大震災の音まで様々な音があり、改めて自然の音に気付かされる興味深いものだった。

生放送であるため、その日の催しの案内をすることもでき、博物館に誘うさまざまな取り組みを行うことができました。自ら発信し、積極的にアプローチをしかけた放送は残念ながら終了となった。

（矢野治巳）

#### 5) 記者懇談会

2002年まで：兵庫県三田庁舎にあった兵庫県北摂整備局が県の関係機関を集めて記者懇談会を実施していた。その懇談会にひとはくも参加。記者発表資料を配布するのみで内容は主にセミナー・イベントの紹介だった。大きな内容の発表は、県教育委員会の記者クラブを通じて発表していた。

2002年度～：行政改革の影響で、兵庫県北摂整備局が閉鎖され、三田庁舎での記者懇談会が終了することとなった。「新展開」以降、三田市政記者クラブとの定例記者懇談会をひとはくで毎月第1木曜に実施するようになる。

当初は、研究員による30分ほどの話題提供をおこなっていた。

2003年6月～：これまで県教育委員会を通じて資料を配布していたが、博物館主体で記者発表を開始。当初、年間20件足らずだった発表件数が現在では50件を越えるようになった。

セミナー・イベント以外の調査研究に関することや生物多様性の話題などのひとはくらしい情報提供が充実してくる。特に2006年8月に丹波市で見つかった恐竜化石の発掘調査については、全国の報道関係者から注目を集めた。全国版に取り上げられる機会も増えた。恐竜効果によって恐竜以外の記事も掲載されるようになった。

恐竜化石発掘調査報告などの解禁設定がある記者発表については、①事前資料配布→②事前記者向けレクチャー→③記者発表（解禁）の3段階でコミュニケーションをとり、公平性を保ちながら、正確で確実な情報を提供している。

2010年度：定例記者懇談会の内容をより充実させるために広報連絡調整会議を毎月開催。

＜広報連絡調整会議の位置づけ＞

①広報を館全体で取り組む体制→意見を出し合える場

②広報ネタの掘り起こし→あらゆる分野からネタを吸い上

げる場

③記者への正確で確実な情報提供→模擬定例レクの場合  
会議には、広報担当課全員及び各課室の長が参加している。  
(小林美樹)

## 7.来館者サービス

ひとはくの来館者サービスは大きく3期に分けられる。第1期は開館から2000年度までで、子ども対象のプログラム開発期である。開館当初の来館者サービスは、展示案内と団体誘導・オリエンテーションをミュージアムメイト(MM)が行い、学校団体対応として展示解説を学習推進員が行っていた。開館後に入館者の45%を小中学生が占めることが判明したことから、学習推進員が1995年8月から小学校4～6年生を対象にセミナー「子ども理科教室」を始め、2001年まで実施した。1997年にはボランティアグループ人と自然の会が、毎週第3日曜日に「ボランティアデー」という子ども向けオープンセミナーをはじめた。これは2000年に「ドリームスタジオ」と名称を変え、現在も内容を充実させて続けられている。

第2期は2001～2007年度で、生涯学習支援・担い手養成期である。新展開によって研究員実施セミナーの枠組みがなくなり自由度が増し、新メニューが多数開発された。試行錯誤の中から生涯学習支援の担い手を養成する連続セミナーが生まれ、講座修了生がホタルや鳴く虫の観察会を実施するなど目に見える成果が現れた。嘱託職員の学習推進員は、2000年度から外部委託のミュージアムティーチャー(MT)に移行した。MTは学校団体対応において、これまでの館内見学支援よりも学校団体向け体験型セミナー実施に力点を置いた。2003年度にはMMが廃止され、フロアスタッフが設置された。フロアスタッフはインタープリターとして子ども向けワークショップの企画開発・実施を行った。このように第2期では、MTやフロアスタッフと共に研究員が新しい生涯学習支援事業を展開し、そして自ら実施できる量に限界を感じた者が担い手の養成を開始した時期であった。

第3期は2008年度以降現在までで、団体サービス開発期である。研究員はこれまで特注セミナーを個人ベースで受け、2006年度にすでに22件実施しており、これをもとに全研究員からメニューを集め、2007年度から団体利用申込者に特注セミナーのメニューの提供を始めた。2008年度には、フェアブル展の関連企画としてフェアブルトークという学校団体向けの20分程度のミニ特注セミナーが開発され、研究員の学校団体対応数が激増した。これはミュージアムティーチャーが2007年度をもって廃止されたことを受けた学校団体対応の担い手の変化であり、現在は生涯学習課の指導主事と研究員で対応している。

### 1)ミュージアムメイト

ミュージアムメイト(MM)は、博覧会のパビリオンにおけるコンパニオンに相当するスタッフで、開館当初12名

で始まり2002年度まで設置された。来館者の対応を行うことから博物館の顔の役割を担う。ヒマワリをイメージした黄色い制服を着用し、各階カウンターに配置され、受付や展示の案内を行う。団体来館者には駐車場からの誘導とオリエンテーションを行っており、好評であった。

MMはオープンセミナーとして、毎日定時に来館者対象に展示解説とアースシアターの上映を行い、希望団体があれば臨時に開催した。これらの解説は研究員がMMの企画会社と共に作成した。MMが来館者から受けた質問に答えるために、研究員を交えて勉強会が行われた。外部委託のため、受託業者が変わるとMMの積み上げてきた経験やマニュアルの移行が問題となった。

震災後に予算の削減が始まり、MMの人員を削減し配置カウンターを減らす対応を余儀なくされた。そのうえ新展開以降、博物館の方針が生涯学習支援を重視するようになり、MMにもその機能が求められたが対応できず、2002年度をもって終了した。

### 2)フロアスタッフ

フロアスタッフはMMの後継として2003年度から設置された。受付を除く来館者対応業務を4名で担当する。制服は廃止され、スタッフジャンパーと名札を着用し、動きやすい服装で勤務する。主に求められていた内容は、来館者と博物館をつなぐインタープリターで、子どもを対象としたワークショップの開発を行った。うきうきシート、デジタル紙芝居、展示室ツアー、フロアスタッフとあそぼう、深田公園探検隊などを企画し、2004年度には280回開催、6,622人参加、2005年度には715回、15,119人参加と、その活動は質・量ともに飛躍的に進展した。これによってひとはくは「毎日なにかがある博物館」となった。活動は館内にとどまらず、キャラバンに参加し他施設でもデジタル紙芝居を開催した。

2007年度に再度受付業務とフロアスタッフを統合し、フロントスタッフと名称を変更したが、ひきつづきフロアスタッフと呼ばれている。受付と統合したため6名(増員日あり)になった。ワークショップをひきつづき毎日開催しており、メニューをまとめた「うきうきカレンダー」を毎月発行している。

### 3)はくぶつかんの日

博物館は勉強に行くところで敷居が高いところ、というこれまでのイメージを変え、親子連れに博物館を気軽に楽しんでいただくために、2000年度から毎月第三日曜日を「はくぶつかんの日」と称し、子ども向け・ファミリー向けのイベントを集中的に実施した。前身はボランティアグループ人と自然の会が1997年度にはじめた「ボランティアデー」である。「はくぶつかんの日」では4階を中心に全館で催しを行ったため、研究員によるオープンセミナーの開催数が増加した。2003年度に「ひとはくサロン」を開設したことが大きく影響した。実施は義務ではなかったが、ギャラリートーク、ジーンファームツアー、収蔵庫探検ツアー、実演!化石工房、ト

ンボとりペナントレースなど、ファミリー向けの企画が開発された。さらにゴールデンウィークには「たんぼぼカーニバル」、夏休みは「ひとはくで過ごす夏休み」、正月は「ひとはくのお正月」として、さまざまなイベントを実施した。

2003年度から開館時間の柔軟な運用として、夏期に開館時間延長を実施した。「はくぶつかんの日」の拡大版として、「こだわり夜店（ゲンゴロウすくいほか）」、「コウモリの超音波を聞いてみよう」、深田公園に各自1人用テントを張って1泊する催し、ファミリー向けコンサート、1階展示室での大人向けコンサート等を実施した。

2006年度にはオープンセミナーが58回実施され、2007年度からすべての土日にイベントがある「いつ来ても楽しい博物館」に運営方針が変わり、「はくぶつかんの日」を特別な日として扱うことは終了した。

#### 4) オープンセミナー

オープンセミナーは、事前申込不要の当日参加型セミナーで、無料または実費負担で開催される。内容は見学・解説型や工作・実習型など様々である。開館当初からMMによって来館者対象の展示解説やアースシアターが実施されていた。研究員も展示解説や夏休み子ども相談室等を実施した。

2007年度から、すべての土日にイベントがある「いつ来ても楽しい博物館」に運営方針が変更されたのに伴い、研究員にオープンセミナーが義務化された。通常は当日の来館者を対象に実施している。ひとはく手帖やホームページで広報するため、それを目当てに来館者が来る人気セミナーもあるが、オープンセミナーの企画内容は毎年試行錯誤されており、座学から体験型に、大人向けからファミリー向けへの変化が見られる。

(半田久美子)

#### 5) フェスティバル

ひとはくフェスティバル(写真3-8)は、1996年に始まり、2011年16回目を実施した。発端は、館内で行われた学校連携や入館者増について検討していた会議で出た「年1回の博物館ファン感謝デー」を実施しようという提案であった。目的は入館者増である。ひとはくを知ってもらうきっかけに



写真3-8 ひとはくフェスティバル深田公園でのステージイベントの様子

しようというもので、夏頃に決まりその年の11月3日に実施しようという強行スケジュールであった。以降も、ひとはくが開館した秋、10月末から11月初めの日曜日に無料入館で実施している。予算はなく、館員が企業等から協賛金を募った。最初に訪れた企業で「何人くらい集まるんですか」と聞かれ、「2,000人は集まると思います。」と応えて、大きいことを言ってしまったと思ったがふたを開けてみると第1回目は5,000人以上の来場者数であった。現在では20,000人を超えている。

ひとはくフェスティバルでは、館内と深田公園を活用し、親子で楽しめる多くのプログラムがあり、深田公園ではステージイベントもあり、食事もできる。プログラムを実施するのは館員だけでなく、市民グループや他地域の博物館のボランティアグループである。例えば、2011年では7ステージ、36グループ、10ブースの飲食ブースを実施している。

運営方法も特徴的で、企画・準備・運営は、すべて館員が行っている。開始当初は、1日中輪転機を回してちらしを印刷したり、テーブルや椅子、ボードの移動で右往左往したり、車の誘導で苦情を受けたりと混乱していたが数年後にはスムーズに運営できるようになっている。まさに館員手作りのイベントで地域を代表するイベントとしても根付いてきたといえる。

ひとはくフェスティバルは、「共生のひろば」と並んでひとはくネットワーク交流の場と位置づけることができる。日頃の研究・実践の成果をプレゼンや展示で発表する「共生のひろば」に対して、ひとはくフェスティバルでは、プログラム等を実践して発表・交流しているものといえる。また、深田公園を活用している意味も大きい。広々とした芝生広場や森をもつ深田公園を博物館の魅力に取り入れることであり、さまざまな世代、地域の人々で公園を活用する形ともいえる。今後も継続する意義は大きいといえる。

(藤本真里)

#### 6) 夏休み無休開館・お正月開館

融通性をもった開館形態をめざし、お客様が博物館を利用しやすい連休などの時期に無休開館をはじめた。お正月開館は2003年度より、ゴールデンウィーク(大型連休)や夏休み無休開館は2004年度より開始した。

ゴールデンウィーク無休開館中には、たんぼぼウィーク(2004～2006年)として、たんぼぼをはじめ春の植物を探して観察するなど、家族で楽しめるセミナーを多数開催した。人手と労力をかける一方で、季節が晴天に恵まれると野外で楽しむ行楽地で過ごす人が多いため、大きな集客につながらなかった。このため現在では、通常のセミナーを活かし、手作りのこいのぼりをつくるなど、季節に応じたセミナーを実施して、この期間にお客様にお越しいただき楽しんでもらう工夫をしている。

夏休みの期間中には、標本づくりの専門家が目の前で作成する「昆虫標本づくり実演コーナー」や化石、岩石・鉱物、

昆虫、植物、環境などに関する質問に専門の研究員が分かりやすく答える、「夏休み理科相談室」(2004～2007年)など夏休みの自由研究の参考になるようなセミナーを実施した。夏の期間は日の入りが遅いことやいろいろな世代のお客様に来ていただけるように開館時間を延長する夜間開館なども実施した。ナイトウォッチングなどの、夜間開館ならではのセミナーを開催した。

正月開館は、親子連れだけでなく、年末年始に帰省し三世代で来館する家族連れの姿が多く見られる。正月開館をはじめた2004年1月より、ひとはく連携活動グループ人と自然の会による、日本のお正月遊びが毎年実施されている。このセミナーでは、日本古来の伝統・文化にふれてもらうために、手作りの道具で、はねつき、たこ作り、たこ揚げ、こままわし、お手玉などの遊びを用意。スタッフだけでなく、参加者の大人が子どもに遊び方を教えるという世代間交流が見られるセミナーの1つとなっている。このほかにも研究員やフロアスタッフなどによる、お正月らしいセミナーを実施し、館内はお正月の雰囲気包まれる。

現在も、ゴールデンウィーク・夏休み無休開館・お正月開館を実施している。

(小林美樹)

## 8. 担い手の養成

### 1) 地域研究員養成事業

博物館では、「ひとはくセミナー」、2002年以降毎年県下10地域程度で実施している「ひとはくキャラバン」、兵庫県下の自然環境の現状を皆さんとともに探る「リサーチプロジェクト」また子どもたちの理科離れをおしとどめ理科好きになってもらう「理科大好きスクール」・「教材開発グループ」・「夏季教職員セミナー」などを通してさまざまな分野にわたる講義・実習・セミナーを行っている。これら講義・実習・セミナーなどの目標は、地域の自然・環境・文化に根ざした「生涯学習」のテーマの発掘と具体的な取り組み方法を参加者のみなさんとともに探ること、また地域での活動の核となるひとはく連携活動グループや地域研究員と博物館とのネットワークを構築して生涯学習を楽しみ、且つその楽しさを子どもたちにも伝えてゆくことにある。

ひとはく地域研究員養成事業が2004年度から始まり、これに合わせさまざまな自然環境調査法に関するマニュアル「ひとはくフィールドワーク入門」を2005年に刊行した。フィールドワーク入門には、岩石・植物・昆虫標本の採集方法から標本の作成法、森やため池の総合的な調査法、そこに住む鳥類や哺乳類の調査法、また古写真や古絵図の緑地計画への活用法に至るまでが網羅されていて、さまざまな調査活動を始めるにあたっての良きテキストとなっている。

「地域研究員養成事業」第一弾として2004年度にスタートした「ひとはくキャラバン in 山東町」(写真3-9)では、山東町中央公民館、山東町教育委員会、山東町、南但馬自然

学校、西宮市立山東少年自然の家、緑のまちづくりプロジェクト、山東町民の方々と実行委員会を立ち上げ、「山東町の魅力、再発見!」をテーマに、さまざまな展示・講座・実習・観察会・自主的な調査計画を練った。展示では、ティラノザウルスの頭骨レプリカや企画展「ワンダフルデザイン」の展示物に加え、山東町内で活動しているグループの昆虫標本・野鳥写真・埋蔵文化財(山東町)などを展示し、地域のグループが観察している地域資源を地域の人々に広く知ってもらう機会とした。

同時に自然環境調査法を習得し新たな地域資源発掘の糸口を見いだすために、地域研究員ステップアップセミナーとして、「ホタル&モリアオガエルの生き物マップづくり」・「チョウを用いた校区生態系調査」・「ハチの話と蜂蜜しぼり」・「水辺の生き物観察会」・「プラスチック封入標本づくり」・「ライトトラップを用いた「夜の昆虫観察会」」・シカやイノシシ、コウモリ、鳥などの「夜の動物観察会」・「植物観察と草木染」などなど、博物館の総力をあげてのサポート体制をしいた。それに続く「特設セミナー」では、地域の人々自らが興味をもったテーマ「山東町のカジカガエル」に取り組んだ。溪流のカジカガエルを捕獲するのはわりあい面倒であるが、鳴き声は遠くからでも誰にでも分かることを利用して、調査員が山東町に散らばり「カジカガエルの鳴き声」に耳を澄ました。この結果カジカガエルはかつては山東町の全域に住んでいたが、現在はごく限られた場所にしか居ないことが明らかとなった。その理由を明らかにする調査活動は続いている。山東町と同時に、淡路島では化石探査と発掘・神戸地域では六甲山の自然等が地域研究員養成事業としてスタートした。

(田中哲夫)

### 2) 大学院教育への参画～高度な担い手の育成

2007(平成19)年4月に、兵庫県立大学・環境人間学研究所・博士前期課程の一部門として「共生博物部門」が新設され、人と自然の博物館をメインキャンパスとした大学院教育がスタートした。環境人間学研究所は、研究面ではさまざまな専門分野の知を「環境」にあてつつ、「人間」を基軸に総合的な視野から新たな専門性を構築することをめざしている。一方、教育面においては環境と人間との関わりについて探求し、高度な専門職業人や地域づくりのリーダーを育成することを目的としている。本研究科博士前期課程は人間環境部門、社会環境部門、共生博物部門の三部門からなり、それぞれが得意とする領域からの多角的なアプローチにより、地域に貢献できる専門家の育成に取り組んでいる。共生博物部門では、生物多様性の保全と持続的利用の観点から人と自然の関係性の本質を統合的に理解し、地域社会において人と自然の共生のあり方を提案する専門家の育成をめざしている。共生博物部門は生物多様性分野と環境戦略分野からなり、2012年4月現在、県立大学自然・環境科学研究所の教員13名が学生の指導を担当している。授業は人と自然の博物館のほか、森林動物研究センターやコウノトリの郷公園の

研究施設もキャンパスとし、フィールドワークを取り入れた実践的な活動と大学院教育をリンクさせた特色あるカリキュラムを組んでいる。社会人入学にも対応できるように集中講義形式を採用し、土・日曜日に開講の授業を履修するだけで単位の修得ができる。

2008年度に最初の修了生を送り出してから2011年度までに、23名の大学院生（うち、社会人6名）が環境人間学修士号を取得し、官公庁、博物館および民間企業など、それぞれの環境のもとで活躍している。以下は修了生の修士学位論文のタイトルである。

【修士論文 題目】

< 2011（平成23）年度 >

- ・ミツバチへの神経系農薬の影響
- ・東アジアにおけるニホンスッポン (*Pelodiscus senensis*) 種群の遺伝的多様性、分布履歴の解明と個体群分類

< 2010（平成22）年度 >

- ・オオカクツツトビケラの生活史と呼吸特性からみた生息分布
- ・コナラ林・スギ林におけるニホンジカの生息密度に伴う植物多様性の変化パターンの比較
- ・スズムシ (*Meloimorpha japonica*) の行動カタログとオス間の順位と行動
- ・西日本に生息する固有種タワヤモリの繁殖と食性に関する研究 — 同所的に生息する同属種ニホンヤモリとの比較を中心に

- ・ツキノワグマにおける捕獲理由の違い及び忌避条件付けの有無と土地利用の関係
  - ・なわばりを軸とした2種のカラスの社会と生態 (総論)
- < 2009（平成21）年度 >
- ・オオカマキリのエソグラム作成とそれに基づく生態学研究
  - ・集落の食物資源量がニホンザルの土地利用に与える影響
  - ・開放水面に営巣するカイツブリ ～人為がもたらす営巣場所の変化～
  - ・都市に生息するカラスの生態に関する研究
  - ・コミュニティの拠点となりうる農産物直売所のシステム ～兵庫県篠山市を事例に～
  - ・再導入されたコウノトリの繁殖における雌雄の役割分担
  - ・兵庫県におけるカワウ *Phalacrocorax carbo* 個体群の確立に関する研究 ～分布と個体数の観点～
  - ・地域素材を活かした小学校地学分野の教材研究 ～兵庫県神戸市の地学素材の有効性と教材化の試み～

< 2008（平成20）年度 >

- ・ニホンジカ (*Cervus nippon*) の採食圧下にあるヒノキ人工林伐採跡地を広葉樹林へ転換する方法の検討
- ・兵庫県内小学校における環境学習の実体とその改善に関する研究 ～持続可能な開発のための教育 (ESD) の視点から～
- ・多自然居住地域の限界集落における集落移転に関する研究
- ・遺伝子系統解析を用いた日本産イグサ科植物の分類学的再検討
- ・兵庫県南部、瀬戸内海沿岸域における環境変動史の解明 ～海洋酸素同位体ステージ7における相対的海水準変動について～
- ・インドネシア・ジャカルタにおける屋外空間の利用実態とその役割 — 住宅に付随するテラスを中心として —



写真 3-9 ひとつはくキャラバン広報ポスター

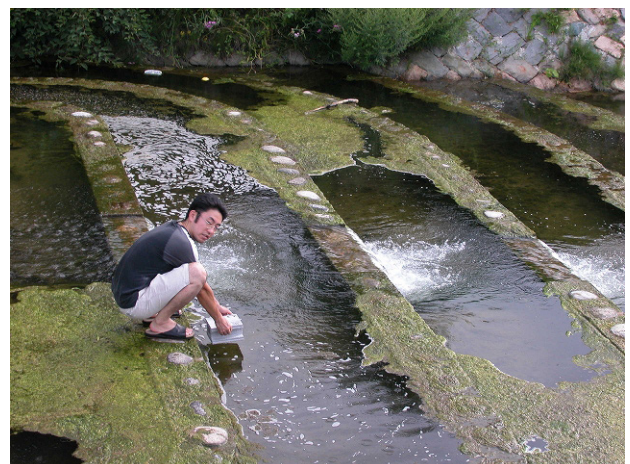


写真 3-10 地域研究員養成事業における調査風景

・水田におけるケリの繁殖戦略 ー田園鳥類の保全研究  
(佐藤裕司)

### 3) 共生のひろば

「共生のひろば」は、兵庫県下・近隣で活躍する市民・団体の、地域の自然・環境・文化に関わる研究や活動の成果を発表する場として、また、連携パートナーの相互交流を図る機会として、毎年2月11日に人と自然の博物館にて地域研究員養成事業の一環として開催している発表会である。2005年度からはじまり、2011年度まで7回開催しており、当館の主要な催しへと成長している。

発表者は、当初は主にひとく地域研究員、ひとく連携活動グループによる発表が中心であったが、地域で自然・環境・文化に関わる研究や活動をすすめている個人や団体も多くなっている。また発表は、兵庫県内に活動の拠点を置くものに制限してはならず、近隣の府県での活動・研究成果も広く受け付けている。発表者の年齢層は、小学生、中学生、高校生、大学生、一般成人、退職世代と多様であるが退職世代の発表が多い傾向にあるため、主催者としては大学生以下の若年齢層の発表が増加するよう呼びかけている。

発表方法は口頭発表およびポスター発表の2通りでいずれも事前にA4サイズ1ページの発表要旨の提出を伴うものであったが、発表者の裾野を広げるために、発表要旨のかわりに100文字程度の内容紹介文の提出を伴う作品展示のカテゴリを2010年度に新設している。

発表件数は第1回37件、第2回34件、第3回45件、第4回46件、第5回58件、第6回52件、第7回52件と推移している。また聴講者数は第1回が100名、第2回が198名、第3回が205名、第4回が300名、第5回が330名、第6回52件、第7回が224名と推移している。このため、口頭発表会場は第1回、第2回は大セミナー室(収容人数 約100名)で実施したが、第2回目に収容人数を大きく越えたために、第3回以降はホロンピアホールで開催することとなった。またポスター会場については第1回、第2回はひとくサロンで実施したが、口頭発表会場の変更、発表件数の増加に伴い第3回、第4回はホロンピアホールホワイエに変更した。また第1回から第4回についてはポスターの展示は2月11日の当日のみとしていたが、第5回以降は「共生のひろば展」として2月11日以降の4月第1週頃までの約2か月間出展されたポスターや作品を展示することとなったため、会場を企画展示室に変更している。

発表内容は多種多様で、ヒメボタルの生息数の15年間の変動を観察し減少傾向にあることを明らかにした地域密着型の研究や、防犯カメラを用いて自宅の庭に夜訪れる動物たちの行動を記録した親子のユニークな研究、小学生による地域のメダカの保護を目的とした環境学習の取り組みや、植物画を描くことを通して高校生とともに植物を学ぶ世代を超えた交流の取り組みなどがある。これらの発表内容については発表会終了後に報告書としてとりまとめられており、印刷物

だけでなく当館HPにてPDF印刷物として公開されている(<http://hitohaku.jp/publications/book.html#hiroba1>)。

また発表者の活動を励ますことを目的として、ユニークな研究・活動内容に対する「名誉館長賞」、特に優れた発表に対する「館長賞」を第2回より、データ量や活動量など努力量の多い内容や継続的な活動に対する「審査員特別賞」、会場からの支持により授与される「会場注目大賞」を第4回より設けている。受賞発表は表3-14に示すとおりである。

(橋本佳延)

表 3-14 共生のひろばにおける受賞発表タイトル一覧

開催回	種別	方法	タイトル	発表者
第2回	名誉館長賞	口頭	地域子ども研究員の活動について	さよう子どもアートスクール・さよう子どもアートスクールサポーター・岸本秀子（佐用町生涯学習課）
		口頭	有馬富士公園の鳴く虫マップ	吉田滋弘（鳴く虫研究会きんひばり）
		ポスター	芦屋川を舞台にした環境学習（芦屋川探検隊！）	大脇巧己（NPO法人さんびいす）・芦屋川探検隊の子どもたち
	館長賞	口頭	子どもたちと鴨川の自然を知る	岸本清明（加東市立鴨川小学校）
		口頭	熱く燃えた！ミヤマアカネマーケティング調査	安達貴美子・河田真紀子・玉村佳子・玉村佳彦（川がきクラブ・みやまあかね委員会）
		ポスター	子どもたちと学ぶー科学の目で描く植物画ー	田地川和子・貴島せい子・肥田陽子（GREEN GRASS）・高橋 晃（人と自然の博物館）・長谷川太一（ひとはくミュージアムティーチャー）
第3回	名誉館長賞	口頭	網を持って逆瀬川へ行こう！～家族で燃えたミヤマアカネ・マーケティング2007～	清水知子・清水政志・清水 要・清水 円（あかねちゃんクラブ）
		口頭	run♪run♪plazaが拓くジュニアナチュラリストの未来	小西真弓（run♪run♪plaza）
		ポスター	空木（うつぎ）という名の植物 ～茎の中は空洞か？～	西野眞美（植物リサーチクラブ）
		ポスター	鳴く虫マップ2007神戸市北区道場町下部の有野川周辺	宮武美恵子（鳴く虫研究会「きんひばり」）
	館長賞	口頭	亜熱帯性の蛾イチジクヒトリモドキの兵庫県姫路市における発生状況	占部晋一郎（テネラル）
		口頭	有馬富士公園湿地ゾーンにおけるインタープリテーションの提案	大根裕士・神田将史・高橋俊介・福永一登（淡路景観園芸学校）、田中沙紀・久保友美・小室宏美・野下彩香・古川舞美・山脇麻代（神戸学院大学）
第4回	館長賞	口頭	マーケティング調査で得られたミヤマアカネの周年経過と行動に関する知見	横田 靖（ひとはく連携活動グループ あかねちゃんクラブ、池田・人と自然の会）
		口頭	さんぽは自然体験のはじまり！	西浦睦子・鈴木久代（ひとはく連携活動グループ NPO法人さんぽくらぶ）
		ポスター	ハヤブサの落とし物（Part 4）	溝田浩美（ひとはく地域研究員）
		ポスター	課題研究報告「森から学ぶ～六甲山系のキノコたち」	藤井日菜子・濱田 諒・稲垣恵理・梅田侑希 ほか第2学年20名 教諭 河合祐介・上林 泰（兵庫県立御影高等学校）
	名誉館長賞	口頭	ソーラーパネルと小型ポンプを用いた簡易魚道の設置～安価で簡便な自然再生の方法～	久加朋子・大澤剛士・石田裕子・佐々木宏展・前田知己・清水洋平（ひとはく連携活動グループ 水辺のフィールドミュージアム研究会）
		口頭	「恐竜発掘ケーキをつくろう！～お菓子を通した学習プログラムの可能性を探る～」	有田寛之・高橋みどり（国立科学博物館）・佐藤大樹・川本麻代・小島綾子・古杉理沙子・鮫島裕子・古満れんげ（兵庫県立三田祥雲館高等学校）・辰巳萌佑子・三浦理紗（大阪教育大学附属池田中学校）・松浦孝一（ル・パティシエ・ブチ・ムッシュ）
第5回	審査員特別賞	口頭	コンクリートの川にホタルを増やそう～池尻川ホタル再生計画～	山下 駿・野澤眞崇・坊 沙織・山本貴之・和田彬宏・佐藤飛鳥・土居恭子（兵庫県立有馬高等学校 科学部）
		口頭	スクール ジーンファーム 地域の絶滅危惧種の保全と増殖	朴木彩乃・森元敏郎・顧問 田村 統（兵庫県立大学附属高等学校 自然科学部 生物班）
		ポスター	木の実・草の実・野菜の種大集合	井上富雄・中島得三（NPO法人 人と自然の会 植物観察会）
		ポスター	コンクリートの川にホタルを増やそう～池尻川ホタル再生計画～	山下 駿・野澤眞崇・坊 沙織・山本貴之・和田彬宏・佐藤飛鳥・土居恭子（兵庫県立有馬高等学校 科学部）
	会場注目大賞	ポスター	ハヤブサの落とし物（Part 4）	溝田浩美（ひとはく地域研究員）
		ポスター	木の実・草の実・野菜の種大集合	井上富雄・中島得三（NPO法人 人と自然の会 植物観察会）
第5回	館長賞	口頭	ミスジナガハグサ（イネ科イチゴツナギ属）の謎2ーミスジナガハグサとナガハグサの相違点ー	西野雅満（植物リサーチクラブ・ひとはく地域研究員）
		口頭	コヤマトビケラの生活史ー幼虫集合行動の目的を探るー	松岡純平・原口太志（兵庫県立福崎高等学校生物部）
		ポスター	NPO法人 日本ハンザキ研究所 が進める環境教育の実践	田口勇輝・栃本武良（特定非営利活動法人 日本ハンザキ研究所）
		ポスター	丹波地方の溜池・湿地における湿生・水生植物の植生	松岡成久（植物リサーチクラブ）
名誉館長賞	口頭	水生寄生蜂Apsilops sp.（ヒメバチ科：トガリヒメバチ亜科）の生活史と寄主探索行動	長崎 摂（豊中市立第十四中学校）・平山智子（神戸女学院大学）	
	口頭	学校のプールにいたミジンコ（Daphnia pulex）の行動と生態 ～耐久卵の殻の意味を中心に～	川底英剛・西 拓樹・木嶋崇人・神野泰淳・美間克也・伊藤 毅・高嶋志門（大阪府茨木市立三島中学校科学部）・佐々木宏展（同 顧問）	
	ポスター	エコトランクで楽しく遊ぶ！学ぶ！	赤阪幸司・芦田博貴・遠藤健彦・大島達也・神谷亜依・高島基郎・田中洋次・南部恭宏・藤長裕平（兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科）	
	ポスター	摘み菜ご飯、できたよ！ おいしいな！	西浦睦子・入口紀代里・鈴木久代・長町美幸・松浦百合・矢野直子（ひとはく連携活動グループ NPO法人さんぽくらぶ）・平谷けいこ・社ひとみ（摘み菜を伝える会）	
審査員特別賞	口頭	15年間で著しく減少した川西市加茂地区のヒメボタル	畚野 剛・市原敏彦・井上道博・恵須川満延・澤山輝彦・中本二郎・平田信活（川西自然教室）	

表 3-14 (つづき) 共生のひろばにおける受賞発表タイトル一覧

開催回	種別	方法	タイトル	発表者	
第5回	審査員特別賞	口頭	ムコのビオトープづくり活動を通して～いのちをかんがえる～	池野知行・小南亘輝・北川達也・紀之内拓巳・坪田祐典・松矢一輝・勝井悠生・原 悠平・室山容一朗・大原創一朗・辻元凌太・門田歎大・芝本光希・小南智輝・郡山佳太・松下 修・藤 奈央樹 (武庫小学校 さかな委員会及び担当者)	
		ポスター	六甲山におけるキノコの長期観測データを用いた出現種数の推定および気象要因との対応分析	森田綾子・大西里佳・田中友香里・鷺見秋彦・中川湧太 (兵庫県立御影高等学校)	
	ポスター	「高校生と学ぶ」～植物画を描く上での自立をめざして～	田地川和子・貴島せい子・肥田陽子 (ひとはく連携活動グループ GREEN GRASS)		
	会場注目大賞	口頭	ムコのビオトープづくり活動を通して～いのちをかんがえる～	池野知行・小南亘輝・北川達也・紀之内拓巳・坪田祐典・松矢一輝・勝井悠生・原 悠平・室山容一朗・大原創一朗・辻元凌太・門田歎大・芝本光希・小南智輝・郡山佳太・松下 修・藤 奈央樹 (武庫小学校 さかな委員会及び担当者)	
第6回	館長賞	ポスター	丹波地方の溜池・湿地における湿生・水生植物の植生	松岡成久 (植物リサーチクラブ)	
		口頭	六甲山再度公園におけるキノコの出現傾向から温暖化指標キノコを探る	中川湧太・中川貴博・小野菜津・長町龍臣・小島あかり (兵庫県立御影高等学校 環境科学部生物班)	
		口頭	クツワムシはどこにいる？-加西市と篠山市の分布調査-	高田 要・河井典子 (ひとはく連携活動グループ 鳴く虫研究会「きんひばり」)	
		ポスター	六甲山上「二つ池環境学習林」の保全整備と活用	堂馬英二 (六甲山を活用する会)	
名誉館長賞	賞	ポスター	ミヤマアカネリサーチプロジェクトの取り組み	宝塚市立西山小学校	
		口頭	コンクリートの川にホテルを増やそう～池尻川ホテル再生計画 vol.2～	瀬戸山知晴・大森聖和子・室崎隆春・棘木 悠・奥 絵梨香・清内優一・鈴木魁人・土居恭子 (兵庫県立有馬高等学校 科学部)	
		口頭	我が家はたぬき御殿～防犯カメラを使った動物たちの観察～	河井典子・河井 周・河井 晨	
		ポスター	「わたしたちの暮らしと大地」(石ころクラブ活動報告)	辰巳淳子 (石ころクラブ)	
審査員特別賞	賞	ポスター	一粒の大豆から、親子で味噌作り!	鈴木久代・矢野直子・松田裕子・松浦百合・西浦睦子・長町美幸・入口紀代里 (ひとはく連携活動グループ NPO法人さんぼくらぶ)	
		口頭	六甲アイランドに植栽されたタブノキを激しく食害するホシベニカミキリ	中安慎太郎・堀内湧也・牧田 習 (ユース昆虫研究室)・吉村卓也(ひとはく連携活動グループ テネラル)	
		口頭	メダカの保護を主とした篠山市今田地域での環境学習	浅田智広・大江 健 (篠山市立今田小学校)	
		ポスター	製造所の緑地を活用した生物多様性への取り組み	林 孝夫 (大阪ガス(株)姫路製造所)	
第7回	館長賞	会場注目大賞	口頭	六甲山再度公園におけるキノコの出現傾向から温暖化指標キノコを探る	中川湧太・中川貴博・小野菜津・長町龍臣・小島あかり (兵庫県立御影高等学校 環境科学部生物班)
		口頭	メダカの保護を主とした篠山市今田地域での環境学習	浅田智広・大江 健 (篠山市立今田小学校)	
		口頭	II世誕生～産卵 ヒサゴクササキ(第2報)	宮武美恵子 (ひとはく連携活動グループ 鳴く虫研究会きんひばり)	
		口頭	猪名川自然林サポータークラブ「タマムシのとぶ森づくり」	三好悦夫・柳楽 忍・白樫誠治・福本吉雄・石丸京子 (自然と文化の森協会 緑部会)	
名誉館長賞	賞	ポスター	淡路島の和泉層群から産出する化石十脚類	岸本眞五 (ひとはく地域研究員)	
		ポスター	丹波地域のホトケドジョウの保全活動	山科ゆみ子・仲井啓郎・樋口清一・大塚剛二・足立隆昭・大谷吉春・長井克己・杉本義治・矢尾健三郎・田井彰人・酒井達哉・村上俊明・上平健太 (ひとはく連携活動グループ丹波地域のホトケドジョウを守る会)	
		口頭	高校生が取り組む地域の特産を守るプロジェクト～「特産でECO」の活動で農都篠山を笑顔に!～	糸川 駿・村山広夢・曹 永河・柳原大樹・庄治優介・尾上史生・金岡紗淑・木村光貴・久下雅人・小島大樹・坂本晃照・高岡 悠 (篠山東雲高等学校)	
		口頭	里山和楽会の活動～地域とともに～	NPO法人社会還元センターグループわ「里山和楽会」	
審査員特別賞	賞	ポスター	水の中の宝石	森本静子 (ひとはく地域研究員、NPO法人シニア自然大学校水生生物科)	
		ポスター	鳴く虫ワールド2011	ひとはく連携活動グループ 鳴く虫研究会「きんひばり」	
		口頭	「未来の食事を支える昆虫食考察グループ Mushi Eater」たちの挑戦!	吉村卓也・阪上洗多・堀内Ray湧也 (ひとはく連携活動グループ テネラル)	
		口頭	コラボで進める「わかりやすく、心に残る環境教育活動」の提案	西谷 寛 (海と空の約束プロジェクト)・富岡美帆 (兵庫県立大学PSS)	
会場注目大賞	賞	ポスター	ミヤマアカネリサーチプロジェクトの取り組み	宝塚市立西山小学校	
		ポスター	地質模型作りで見ると、みんなの山陰海岸ジオパーク	藤本啓二・藤本守美・藤本悠人・岡崎聡郎・岡 記佐子・松原 勝・松原陽子・堀家 建・北山義雄・酒井正治・荻田雅弘・谷川俊男・森本泰夫・瀬戸口厚美・河津 哲・舟木淳子・島田大二郎・長島ひとみ・辰巳淳子・辰巳萌佑子・黒川義美・田中博子・土井口賢次・市村恵美子 (石ころクラブ)	
		口頭	「未来の食事を支える昆虫食考察グループ Mushi Eater」たちの挑戦!	吉村卓也・阪上洗多・堀内Ray湧也 (ひとはく連携活動グループ テネラル)	
		ポスター	地質模型作りで見ると、みんなの山陰海岸ジオパーク	藤本啓二・藤本守美・藤本悠人・岡崎聡郎・岡 記佐子・松原 勝・松原陽子・堀家 建・北山義雄・酒井正治・荻田雅弘・谷川俊男・森本泰夫・瀬戸口厚美・河津 哲・舟木淳子・島田大二郎・長島ひとみ・辰巳淳子・辰巳萌佑子・黒川義美・田中博子・土井口賢次・市村恵美子 (石ころクラブ)	